『久志と真司』

武井　啓介

【あらすじ】

令和6年春、大学受験を控える高校三年生の門真真司(17)は、自分の将来に明確なビジョンがなく、両親に言われるがまま、とりあえず大学推薦入学を目指し、内申書のアピールのため、何となく老人ホームのボランティアに参加する。そこには同じ高校、クラスの喜多川有紗(17)がおり、二人で老人の話を聞く仕事を割り当てられる。

適当に業務をこなす真司だったが、最後に会話した老婆から＝久志＝という人物と間違えられる。その日から時々自身が久志となった夢を見始め、久志の人生を垣間見ることに。

一方、昭和19年に生きる沢崎久志(18)も、ある日突然真司という少年になる夢を見始め、それを恋人の伊藤朱美(18)に話し、令和という時代とは、真司は一体誰なのか、久志の子孫ではないか、などの推測を楽しむ。

当初は優柔不断で信念の無い真司、そして物で溢れ、人と人との関わりが薄い令和という時代を好きになれなかったが、苦しみ、悩みながらも徐々に成長していく真司とその家族の姿を、真司を通して見ることで、少しずつ真司を認め、令和の時代も捨てたもんじゃないと思うようになる。しかしその矢先、久志に赤紙が届き、戦場へ赴くことに。出征前日、もし将来真司が実在し、夢を通してこの場面を見ていたら、見つけ出すかも、という希望を込め、真司への贈り物を神社の杉の木の下に埋める。

久志出征の夢を見た直後、自身が映っているはずの鏡に映る久志の姿を認め、直後にあるはずの無い久志の記憶が流れ込み、自身が久志の生まれ変わりであることを確信。あの日、自分に声を掛けた老婆は歳を重ねた朱美であると推測し、有紗と共に朱美に会いに老人ホームへ再度赴く。

【登場人物表】
2024 年（令和 6 年）

・門真家
門真　真司（17）高校三年生
門真　達司（54）真司の父・サラリーマン
門真　道子（51）真司の母・主婦
門真　光（19）真司の姉・有名大学二年生

・喜多川家
喜多川　有紗（17）高校三年生
喜多川　誠（47）有紗の父・会社員
喜多川　愛子（46）有紗の母・会社員

・亀宮高校（かめのみや）
矢野　毅（17）高校三年生
岡野　翼（17）高校三年生
熊谷　哲二（45）国語教師
北島　美代子（44）英語教師

・雲雀荘
楢崎　宏（38）広報科職員
沢崎　紅美（85）雲雀荘オーナー
篠崎　朱美（99）入居者
セクハラ男性（83）入居者
受付女性職員
紅美専属ドライバー

・東湘ゼミナール
藤本　一（51）予備校講師

【登場人物表】
1944 年（昭和 19 年）

・沢崎家
沢崎　久志（18）鉄工所勤務
沢崎　早苗（40）久志の母・主婦
沢崎　裕二郎（8）久志の弟・学生

・伊藤家
伊藤　朱美（18）縫製工場勤務
伊藤　千代（39）朱美の母・主婦
伊藤　紅美（5）朱美の妹

・中野家
中塚昭雄（48）千代の兄・無職
中塚三重子（45）昭雄の妻・主婦

・その他
豆腐店おかみ
鉄工所作業員
国民服を着た中年男性
看護婦
該当演説する中年男性

○老人ホーム雲雀荘・ロビー・朝

有紗「あれ、門真じゃん」

真司「げ、何で喜多川がいんだよ」

老人ホーム＝雲雀荘＝でのボランティア活動で集まった学生ボランティア十数名の中で、同じ学校、クラスの門真真司(17)を見つけ話し掛ける喜多川有紗(17)。

有紗「決まってんでしょ、内申書の点数稼ぎ。じゃなきゃわざわざ日曜朝早く起きないっつうの。いつもなら今頃まだベッドの中よ」

真司「（ニヤッとして）だよな」

有紗「（小声で）し、職員の人来たよ」

楢崎「はい、学生ボランティアの方々、お待たせしました。集まってくださーい」

業務説明をする、同ホーム広報科の楢崎宏(38)。やる気のない表情で聞く真司の傍で、メモを取りながら何度も頷く有紗。

真司「（小声で）出たー、優等生きどり」

有紗「（強い口調の小声で）うるさいっ」

真司と有紗の方を見る楢崎。

楢崎「そこのお二人、何か質問ですか？」

ニヤついて俯く真司、有紗は挙手する。

有紗「あ、はい。お年寄りの方々と話す時の注意点について話しておりました」

楢崎「そうですか。ではお二人には、入居者とお話をするお仕事をお任せしますね」

有紗「はい、一生懸命頑張ります！」

不満そうな真司、横目で有紗を睨む。

○同・施設内・午前

数名の入居者たちと会話する有紗と真司。

有紗はオーバーリアクション気味。

有紗「え、嘘、83？70代前半かと思いました」

入居男性「そうじゃろ、若さの秘訣はな、毎日の散歩と、あと…これじゃよ、これ」

男性、そう言って右手の小指を立て、イヒヒと下品に笑う。

真司「（小声で）キモ…」

男性「え、なんじゃって？」

有紗「お元気ですねー、って。ね？」

鋭い目つきで真司に肘打ちする有紗。
男性「そうじゃろそうじゃろ、イヒヒ」
ぎこちなく男性と笑い合う有紗。冷笑し、右手で口を覆い、あくびを隠す真司。

○同・職員食堂・昼
向かい合って座って食事する真司と有紗。
有紗「あー、マジキモかったぁ、あのクソジジィ。今時これは無いでしょ、これは」
有紗、右手の小指を立てて、真司の眼前に突き出す。
真司「掃き溜めだよな、老人ホームなんて」
真司、そう言ってケラケラ笑う。
有紗「あんたもあんたでさぁ、もうちょっと真面目にできないの？私の評価まで下がるじゃん。てか、不味くね？ここのご飯」
生姜焼きを食べ、不満そうな有紗。
真司「お前が朝余計なこと言うから、じいさんばあさんと話すとかいう、ガチでだるい仕事割り当てられたんじゃん。確かにあんま美味くないな、ここのカレー」
そう言ってカレーを口に運ぶ真司。
真司「それにしても、お前よくあんな楽しそうに会話するフリできるよな。分かってても絶対無理だわ、俺」
有紗「全て内申書のためよ。私、絶対松大の推薦枠取りたいし。一つしかないのよ、枠」
真司「松大か…すげぇじゃん」
真司、コップに入ったお茶を飲む。
有紗「そういや、あんたのお姉さんも推薦で松大だったよね？」
真司「…そうだよ」
有紗「すごいなぁ。あんたも松大目指すの？」
真司「無理だろ」
有紗「じゃあどこ受けるの？」
真司「…分かんね」
呆れた表情をし、生姜焼きを食べる有紗。
有紗「分かんね、って…じゃあ何で今日ボランティア来たのよ」
真司「…何となく。親に言われて、行った方

が良いからって」
有紗「（ため息をついて）あんた、どうしたらそんな何も考えないで生きてられんのよ」
真司「…悪かったな」
有紗「でもあんたさ、確か理系科目はすごい成績良かったじゃん。今からでも理転して、そっち系進めば？」
真司、決まり悪そうに目を逸す。
真司「うん…ただ、得意だけどあんま興味ないんだわ、そっち系」
有紗「じゃあ何に興味あんのさ？」
真司「…」
はっきりしない真司に、イラついた様子でお茶を飲み干し、テーブルに置く有紗。
有紗「とにかく、あと半日は私の邪魔だけはしないでよね。私のライフプランはね、松大行って、一流企業で勤めて、安定した人生を送ることなの。そのためにはこんなアホみたいなボランティアも重要になるかもしれないんだからね」
真司、残ったカレーライスを掻っ込む。
真司「はいはい、分かったよ、名女優さん」
有紗、調子に乗って、
有紗「アカデミー賞もんでしょ」

○同・施設内・午後ー夕方
引き続き入居者たちと会話する真司と有紗。建物の外は桜が満開となっている。
有紗「よし、あと30分！あと一人行けるかな」
真司「（だるそうに）マジかよ。もういいよ、ちょっとサボろうよ」
有紗、真司に肘打ちし、遠方を見るよう顎で示す。その先では楢崎が学生達を順々に見回っている。
真司「目ざと…仕方ねぇ、じゃあラスト行きますか」
有紗「あ、あそこのお婆ちゃんにしよ」
有紗、窓際の机に一人座り、窓の外を眺めるかなり高齢の老婆を指差し、真司の腕を引っ張り近づく。老婆の前まで来る

と、思いっきり愛想笑いする。
有紗「こんにちはぁ。お元気ですか？」
老婆「…」
老婆、反応せず。有紗、声のボリュームを上げ、再び話し掛ける。
有紗「こんにちは！いいお天気ですね！」
老婆「…」
老婆、見向きもせず。ため息をつき、真司の方を見る有紗。
有紗「ダメだ、聞こえてない」
真司「呆けてんだろ。もういいよ、次行こ」
その瞬間、老婆がゆっくり真司の方へ顔を向け、目を見開いて話し掛ける。
老婆「…久志さん？」
真司「は？俺？」
真司、キョロキョロ周りを見る。老婆、真司の両腕を、細い腕からは想像できないほどの強い力で握る。
老婆「久志さん、久志さんでしょ？あぁ、待っていたんですよ、ずっと」
老婆、そう言って、涙を流し始める。直後一瞬くらっとする真司、だが踏みとどまり、混乱し呆然と立ち尽くす。遠くでは楢崎がじっとその様子を見守っている。
真司「あの、え…俺、ひさしじゃ…」
有紗「（真司の肩に手を回し）ごめんね、お婆ちゃん、ひさしさん、もう帰らないといけないんだ。（小声で）ほら行くよ」
真司「あ、うん、またね、お婆ちゃん…」
真司と有紗、いそいそとその場を離れる。
有紗「あんた、ここに知り合いがいるなら早く言いなさいよ」
真司「いや、知らないよ、あんなお婆さん。いやぁ、ビビった」
真司、両腕を見ると、老婆の指の跡が残っており、ゾッとする。二人の後ろ姿を黙って見つめる老婆。

○同・ロビー・夕暮れ時
学生全員集合し、楢崎の最後の話を聞き、

解散する。各自散らばっていく中、楢崎が真司に声を掛ける。

楢崎「お疲れ様。門真くん、だったよね？失礼だけど、篠崎さんの親族の人？」

澄まし顔でしれっと真司の横に来る有紗。

真司「え、あのお婆さんですか？いや、全く知らない人なんで、声掛けられた時、めちゃくちゃ驚いたんですけど…」

逆に楢崎が驚いた顔をする。

楢崎「えぇ、そうなの？実は篠崎さん、あのお婆さんね、10年くらい前にこのホームに来て、話し掛けられたのは君で二人目」

有紗「（大袈裟に）えー、すごい、私たち」

真司、冷めた目で有紗を見る。

楢崎「篠崎さん、君のことなんて呼んでた？」

真司「ひさしって呼ばれました」

楢崎、少し考え込む。

楢崎「ひさしさん…か。聞いたことないな」

真司「あの、僕で二人目ってことなんですけど、もう一人の方は？」

楢崎「ん？あぁ、ここのオーナーだよ。実は彼女の妹さんなんだけどね」

真司「妹さん…だけですか」

楢崎「そう、だから同じ親族の方かと思ったんだけどね。でも、見ての通り篠崎さん、もう呆けちゃってて、最近は妹さんも分かる時と分からない時があってね」

有紗「えー、可哀想、篠崎さん」

真司、有紗の言動にドン引きしている。

楢崎「でもどうやら親族でもないようだし、彼女も誰か他の人と勘違いしたのかも。引き留めて悪かったね、気をつけて帰ってね」

有紗「お疲れ様です！」

真司「…お疲れ様でした」

○門真家・リビング・夜

リビングにて父・門真達司（54）、母・道子（51）、姉・光（19）と食事を取る真司。

達司「今年は万願寺とうがらしをたくさん植えたからね。夏が楽しみだ」

道子、呆れた様子で説明する。

道子「お父さん今日一日中庭にいたのよ。まだ4月なのにこんなに日焼けしちゃって」

光「パパ、スイカも作ってよ」

道子「無理よ。うちの庭そんなに大きくないし。ねぇ。お父さん？」

達司「いやぁ、分からないぞ。花壇の隣のスペースを使えば…」

道子「（遮って）ダメよ、あそこは今度向日葵を植えるんだから」

達司「（しゅん、として）はい…」

光「えー、スイカの方が良いじゃん。ね、真ちゃんもそう思うでしょ？」

真司「（あまり興味なさ気に）…うん」

道子「そういえば真司、今日ボランティアどうだったの？」

真司「（道子の方を見ずに）別に」

道子「別に、ってことはないでしょ。質問されたらちゃんと答える、これ常識」

真司、深いため息をつく。

光「出たでた、ママの面接対策指導。すごかったなぁ、私の時も。推薦面接秋だから、まだ半年あるじゃん」

道子「ダメダメ、今からきっちり癖付けとかないと。本番で、別にぃ、なんて言ったら一発レッドよ」

光「一発レッドって…」

真司「…いや言わねぇし。しかもまだ推薦取れるかも分かんないし」

道子「だからどこの推薦でも取れるように今から頑張んないといけないんじゃないの。推薦の方が良いに決まってんだから。何より学費安いし。それになにも光みたいに松大の枠取れとは言ってないんだから」

光「ママ…」

うんざりしたような表情をする真司。

道子「とにかく、何か聞かれたらしっかり答えるようにね。それよりあんた、理系科目得意なんだから、今からでも理系クラスに変えてもらえないの？そっちの方が推薦取

りやすいでしょ」
光「真ちゃん、理系すごいもんねー」
真司、ふと思い出したように尋ねる。
真司「そういえば…ウチって、篠﨑さんって親戚いる？」
道子「篠﨑？」
道子と達司が顔を見合わせる。
達司「いやぁ、門真の家系ではないなぁ。母さんのうちは？」
道子「うちも多分ないと思うけど…なんで？」
真司「今日知らないお婆さんに人違いされて、そのお婆さんが篠﨑さんっていうらしい」
道子「へー、それで？」
真司「そんだけ。いないならいい。ご馳走様」
真司、食器を片付け、二階の自室へ上がろうとすると、背後から道子の声。
道子「ちょっとでも勉強しなさいよ」
達司「母さん…」
真司、深いため息をつき、二階へ上がる。

○同・真司自室・夜
真司、机に向き合って座り、勉強道具は出しているが、スマホを見ている。そこへドアをノックする音がする。
光「真ちゃん、入るよー？」
真司、すぐさまスマホをしまい、勉強するフリをする。直後、光が入ってくる。
真司「ひぃちゃん、どうしたの？」
光「見てー。今日新しいネイルにしたんだー」
光、両指を突き出し、光沢のある黒のネイルを自慢気に真司に見せる。
真司「（反応に困りながらも）良いじゃん」
光「ありがとー。そんだけ」
光、ドアの手前で、真司に振り向き一言。
光「真ちゃんはさ、自分のやりたいこと、好きなことを後悔しないようにやれば良いんだからね。じゃ、おやすみー」
真司「え？」
真司、光の方へ振り向くが既に部屋を去り、ちょうどドアが閉まる。

真司「…やりたいこと、か」
頭の後ろで手を組み、椅子の背もたれに寄りかかる。ふと老婆に掴まれた両腕を見ると、指の跡は既に無くなっているが、感触はまだ残っている。真司、窓から夜空を見上げる。
真司「なんだったんだろう、あの人」
数秒後、またスマホを取り出し、画面に戻る。(FO)

○沢崎家・久志自室・朝
(FI) 朝の陽光が差し込み、沢崎久志(18)の顔に差し込む。久志、ゆっくりと布団の上に起き上がる。
久志「おかしな夢を見たものだ」

○タイトル「久志と真司」

○沢崎家・居間・朝
割烹着姿の沢崎早苗(40)が久志と弟の裕二郎(8)の朝食を配膳していると、久志が二階から降りてくる。
久志「おはようございます、お母さん」
早苗「おはよう。あら、何かあったの？何だか難しい顔をして」
久志、ちゃぶ台の前に座り、手を合わせていただきます、と呟き、食事を始める。
久志「いえ、少し不思議な夢を見まして。普段なら夢のことなんて起きたらすぐ忘れるんですが、昨夜見た夢はとても鮮明で、そして印象的で…まだはっきりと覚えているんです」
早苗「(少し心配そうに)大丈夫かい？昼間の工場の仕事で居眠りでもして、偉い人に目を付けられたらえらい事だよ」
久志、少量に盛られた白米を口に入れる。
久志「大丈夫ですよ、お母さん。ただの夢ですから」
早苗、心配そうに横目で久志を見る。そこへ裕二郎が目を擦りながら起きてくる。

裕二郎「おはようございます」
久志「おはよう、裕二郎」
早苗「おはよう。さぁ、顔を洗って、朝ご飯をしっかり食べて、今日も一日元気に行って帰ってきなさい」

○凪町内・朝
朝日に照らされる凪町内。国民服を着て、鞄を肩から掛け、歩いて職場の鉄工所へ向って歩く久志。
久志「おはよう、おばちゃん」
久志、豆腐店の店先で作業する、モンペに手拭いを頭にかけたおかみに声を掛ける。看板の文字は右読みで書かれている。
おかみ「おはよう、久志ちゃん。今日も頑張っていってらっしゃいね」
手を振る久志。その横を一般の車に混じり、時折軍用車も通る。

○鉄工所・日中
煙突からひっきりなしに煙が立ち上がっている。内部で黙々と作業をする工員達。その中に混じり、額に汗をかきながら防護マスクをかぶり、溶接作業をする久志。
作業員「沢崎くん、次これ頼むわ」
久志「はい、分かりました」
マスクを外し、額の汗を拭く久志。フウと、深く息を吐き出す。

○同・入口・夕暮れ時
入り口からぞろぞろと出て来て、それぞれ帰路につく工員達。入り口に面する通りの向かいに、一人ポツンと、おさげ頭の伊藤朱美(18)が立っている。
朱美の姿を捉えた久志、小さく手を挙げ、それに応える朱美。

○凪町内・川沿いの道・夕方
久志と朱美が並んで歩き、道脇の満開の桜に見惚れている。

朱美「今年も、綺麗に咲きましたねぇ」
久志「そうですね」
久志、朱美に気付かれないよう、自身の体の臭いを嗅ぎ、さりげなく朱美から少しだけ距離を取ろうとする。朱美、それに気付き、平然と言い放つ。
朱美「私、臭いなんて気にしてませんから」
久志「え？」
朱美「久志さんの汗の臭い。私に気を遣って距離を取ってるんでしょ？気にしませんから、私。それに、汗をかくってことは、お仕事に真剣に励まれてるってことでしょ」
朱美、そう言って、久志の体に密着するくらい近づく。久志、恥ずかしそうに顔を赤らめる。

× × ×

土手を下った先の川岸に並んで座る二人。
周りには他の男女がいたり、お年寄りが散歩したりと、のどかな風景が広がる。
朱美「へぇ、じゃあ、その夢の中であなたは真司という少年で、その大きなお屋敷で働いていたの？」
久志「働いている訳ではないようで、その日は何故か、その屋敷でお年寄りと接する必要があったみたいです」
朱美「へぇ、もっと聞きたいわ。その大きくて綺麗なお屋敷で、大勢のお年寄りが一緒に暮らしているの？」
久志「ええ、若い人達もいるようですが、住人はほとんどお年寄りだけのようでした」
朱美「何かしら…集団疎開とか？」
久志「僕もそれを考えてみたんですが、どうもそんな様子でもなくて…戦争中ではないようでした」
朱美「まぁ、羨ましい」
久志「戦争がないのはいいのですが、何だかみんなどこか寂しげで、何と言うか…何か理由があり家にいられなくなって、仕方なくそこで暮らす、と言ったような…何とも異様な光景でした」

久志、川原を散歩する老夫婦を優しい目で見つめる。

朱美「そうなの？何だか、変なお屋敷ね」

久志「ええ…しかも更に不思議なのが、その中の一人の老女が、会ったこともない僕…真司少年を見て、僕の名前を呼ぶんです」

朱美「嫌ぁね、気味が悪い」

久志「ただ、彼の家はすごく裕福でした。夕食にたくさんのおかずがずらりと並んでいて…どれも美味しかったなぁ」

朱美「あら、本当？」

久志「ええ、それに見たこともない不思議な機械も色々あって、名前は分からなかったけど、大きな黒いガラス板があって、暗号が書かれたような、黒くて細長いものに触ると、そのガラスに映像が映し出されるんです。おまけに音も出るんです」

興奮した様子で、身振り手振り朱美に説明する久志。朱美も興味深そうに聞く。

朱美「活動写真のようなもの？」

久志「えぇ、それに近いかも。あと、それよりもずっと小型で、それこそ魔法のような機械があって…確か、皆それを巣魔補（すまほ）って呼んでいたっけ…とにかく何でも揃っていて、街も見たことも無いくらい明るくて大きくて、凄く便利な世界なのは間違いないんです。ただ…」

朱美「（久志の顔を覗き込むように）ただ？」

久志「その世界の人々は、皆あまり幸せそうには見えなかった。人と人の繋がりが希薄で、真司も家族とあまり話をしない少年で、長い時間孤独にその巣魔補ばかり見ていて…思い返すだけで嫌な感じがします」

話終えて少し疲れたような表情をする久志。綺麗な夕焼け空を見上げて呟く朱美。

朱美「分からないわね、幸せって」

久志「そうですね…でも、僕は…」

そこへ、桜並木の方から、国民服をきた一人の中年男性が強い口調で喚きながら近づいてくる。

男性「お前達、こんな時間に何をしている。早く帰って、明日の準備をして寝なさい。まったく、近隣諸国では大勢の兵隊達がお国のために敵国殲滅のため日々奮戦しているというのに…最近の若い者はたるんどる、けしからん」

ブツブツ言いながら立ち去り、他の男女にも絡む男。

朱美「嫌ぁね、戦争って。本当に」

久志「そうですね。そろそろ帰りましょうか」

朱美「そうね」

立ち上がり、朱美に手を差し出す久志。その手を取り、立ち上がる朱美。土手を上る途中、思い出したように久志に問う朱美。

朱美「そう言えば、さっき何と言おうとしていたの？」

久志「え？」

朱美「ほら、あの嫌なおじさんがくる前…何か言う途中だったでしょ？」

久志、思い出し、再度顔を赤らめる。

久志「あの、僕は…もしも夢の続きを見たら、またお話します、と」

朱美、優しい笑顔を浮かべる。

朱美「そう、楽しみにしているわね」

再び桜並木を歩き出す二人。その瞬間、二人の上空をけたたましい音をあげ、小型戦闘機数台が飛んでいく。

朱美「来年も、また同じよう満開の桜を見れると良いわね」

久志「ええ、本当に…」

ゆっくりと夕暮れの桜道を歩き去る二人の後ろ姿。（FO）

○門真家・真司自室・朝

ベッドの上でガバッと飛び起きる真司。外は既に太陽が上りかなり明るい。

真司「何？今の夢…」

○亀宮高校・三年四組教室・朝

一限前、自分の机に突っ伏す真司。そこ
え有紗が後ろから声を掛ける。
有紗「おっはよー、ひさしー」
真司、不機嫌そうな顔で有紗を睨む。
真司「…その名前で呼ぶな」
有紗「お、なんか疲れた声。昨日の疲れがま
だ残ってる？」
だるそうに体を起こす真司。
真司「親に聞いたけど、いないって、篠﨑。
親戚中」
有紗「え…そうなの。じゃあ何だったんだろ
うね。昨日のお婆さん」
真司「分からん。ただ一刻も早く忘れたい。
ただ、すげぇ馬鹿げてるんだけどさ…」
有紗「（前のめりになり）なになに？馬鹿げ
た話大好き」
真司、若干躊躇したあと、囁く。
真司「俺、昨日、久志って人になった夢見た」
有紗、プッと笑う。
有紗「何それ、ウケるー。あんたって意外と
影響受けやすいんだねー」
真司「…話さなきゃ良かった」
有紗「ウソウソ。怒んなよ、門真。それで、
どんな人だった？ひさしは」
真司「詳しくは分からなかったけど、俺らよ
り若干年上だと思う。工場で働いてて、あ
けみって彼女がいて…あと、多分戦時中だ
った。教科書に載ってるような古い服着て
たし、看板とか読み方逆だったし」
有紗、大袈裟に考える人のポーズを取る。
有紗「戦争かぁ…逆算すると、あのお婆ちゃ
んの昔の良い人、とか」
真司「バカ、あくまで夢の話だぞ。第一、あ
の婆ちゃん今いくつかも分かんないし」
有紗「そうなんだけどねー。でもなんか気に
なるよねー」
そこへ、一限目国語の教師で、二人の担
任でもある熊谷哲（45）が入ってくる。
熊谷「おはよう、みんな早く席付け。中間テ
ストまであっという間だからな、今回はテ

スト範囲広いから、気ぃ引き締めていけよ」
真司、大きなため息をつく。
× × ×
四限目英語の授業、英語教師の北島美代子（44）が関係代名詞を説明している。
北島「オーケー、ではこの現在完了の文の put の過去分詞形はどうなりますか？では…Ms. 喜多川？」
有紗、机に突っ伏し爆睡している。周囲の生徒がクスクス笑っている。
北島「オーノー、では…Mr. 門真？」
いきなり当てられ狼狽する真司。
真司「あ、えっと…putted?」
北島、右人差し指を左右にワイパーする。
北島「ノーノー、Mr. 門真、put の活用は全て put ね。これ引っ掛かりやすいから、エビバディ気をつけてネ」
真司、恥ずかしそうに俯く。
× × ×
昼休み、教室で友人の矢野毅（17）、岡野翼（17）と机を並べて弁当を食べる真司。
矢野「お前さぁ、putted はねぇよ、putted は」
真司、思い出し恥ずかしがる。
真司「うるさいな、喜多川が悪いんだ、あいつが寝てるから」
岡野「はは、どうでも良いっての、put だろうが putted だろうが。どうせ受験終わったら全部忘れるんだからさ。それよりお前ら、今日放課後久しぶりにカラオケ行かね？」
矢野「お、いいねぇ、行く行く」
岡野「真司はよ？」
真司「…うん、行くか」
矢野「何だよ、なんか元気ねぇな。忘れろよ、putted なんてさ」
真司「ちげぇよ、ただちょっと疲れてるだけ」
岡野「もしかして朝の熊谷の発言？ヤバイよなぁ、中間。俺もそろそろ予備校行くかな」
真司「…予備校？」
矢野「そ、周りの奴らほとんど行ってんじゃん。俺も行かないとダメかな…」

岡野「真司はさ、理系科目得意なんだし、そっちに進んだ方がいいんじゃね？推薦取れんだろ、理系強い大学で。てか、お前なんで文系クラス志望したの？」
真司「…理系科目実はあんまり好きじゃないし、友達もこっちのが多いし…」
岡野、呆れたような口調で答える。
岡野「なーに贅沢言ってんだよ、得意な科目で勝負した方がいいに決まってんじゃん。それにさ、どこでも入ったもん勝ちだろ、大学なんて。辛いのは今だけ。俺大学入ったら一切勉強なんてしねぇからな」
真司「え…じゃあ何すんの？」
岡野「（意外そうに）決まってんじゃん、飲みサー、合コン、バイト、最後は就活。そんで適当な会社入って、適当に生きてくさ」
真司「そう…なのか」
矢野「所詮そんなもんだろ、人生なんてさ」
そこへ有紗がやってくる。
有紗「門真ー、後で英語のノート写させてよ。さっきの授業、最後の方寝ちゃってさ」
矢野、からかうような口調で、
矢野「喜多川、こいつの英語のノート見たら間違って単語覚えちまうぜ」
真司「（不快そうに）うるせぇな」
岡野「俺ら今日カラオケ行くけど、喜多川も行くか？」
有紗「（軽蔑するように）行かない。行く訳ないじゃん、受験生なのに」
その場を歩き去る有紗。
矢野「受験生…嫌な響きだ」
岡野「マジでな。あーあ、やだなぁ中間」
真司「…」

○カラオケ店・夕方
カラオケ店の個室で熱唱する矢野と岡野。
矢野「おっし、次俺氷室入れよ」
岡野「シブ…でも良いよなぁ、氷室。真司は何入れんの？」
真司、少し考え込んだ後、手を合わせる。

真司「わりぃ、俺、ちょっと用事思い出したから、今日は帰るわ」
矢野「え、まだ来たばっかじゃん」
真司「わりぃわりぃ、また今度な。後でお金払うわ」
いそいそと出ていく真司。その後姿を目で追う矢野と岡野。
矢野「なんだあいつ、付き合い悪りぃな」
岡野「ほっとけよ、あんなつまんねぇ奴。あ、俺 YOASOBI 入れよっと」
真司、夕暮れ時の帰り道を一人自転車を漕いで自宅へと進む。

○門真家・リビング・夜
道子が達司のシャツにアイロンをかけていると、真司が二階から降りてくる。
真司「…お母さん」
道子「んー何？真司」
真司「あのさ…俺、予備校行こうかなって思うんだけど」
アイロン掛けを止め、真司を見る道子。
道子「予備校ね、そうね、行った方がいいわね。でも、もちろん推薦も諦めてないんでしょ？」
真司、道子の顔を見ずに答える。
真司「うん…でも他のみんなも行っててさ、俺も行った方がいいかなって」
道子、真司の顔を数秒見つめる。
道子「分かった。お父さんにも相談してみる」
真司「うん、サンキュー」
自室へ上がっていく真司。道子、しばし考え込んだ後、アイロン掛けを再開する。

○喜多川家・有紗自室・夜
夜遅くまで机に向かい勉強する有紗。ペンを置き、椅子に座りながら伸びをする。
有紗「んー、今日はここまでにするか」

○同・リビング・夜
有紗、一階へ降りると、薄明るい室内で

ソファに腰掛け、テレビの画面を虚な目で見つめる父・誠(47)の姿を捉える。誠、有紗をチラ見し、すぐ画面に視線を戻す。

誠「…まだ起きてたのか」

有紗、台所の照明を点け、冷蔵庫を開け、1.5ℓのコーラをコップに注ぎ、ぐいっと半分飲む。

有紗「うん…勉強してた。お母さんは？」

誠「…知らん」

有紗、残りの半分も一気に飲み干す。

有紗「…ママに優しくしてよ、パパ」

誠「…」

コップを水で濯ぎ、水切りに置く有紗、無言で階段を上がっていく。無気力でテレビを見続ける誠。

○門真家・真司自室・夜

自室に戻り、椅子に腰掛ける真司。卓上には勉強道具が出ているが、結局スマホを取り出し、操作を始める。(FO)

○沢崎家・久志自室・朝

目を開け自室の天井を見つめる久志。

久志「…またか」

○同・居間・朝

早苗が今日も久志と裕二郎に朝ごはんを配膳している。久志が静かに朝食を食べる横で、早苗が話している。

早苗「…ということがあったのよ。もう私、可笑しくて、可笑しくて」

笑ってそう言うと、左手で口元を隠す早苗。その様子をじっと見つめる久志。

早苗「まぁ、何？まじまじと見て」

久志「いえ、やはりお母さんの言葉遣いは綺麗で落ち着きます」

早苗「あら、何を言ってんだろ、この子は」

恥ずかしそうにする早苗を優しく微笑んで見つめる久志。そこへ、裕二郎がブリキ製のおもちゃの車を抱えてやってくる。

裕二郎「（心配そうに）お兄ちゃん、この車、また動かなくなっちゃったんだけど…」
久志「ん？どれ、貸してごらん」
久志におもちゃの車を手渡す裕二郎。一通り全体を見る久志。
久志「恐らく歯車を取り替えれば直ると思う。今日帰ったら直してやるよ」
久志、裕二郎に車を返す。裕二郎、顔を輝かせる。
裕二郎「ありがとう、お兄ちゃん」
早苗「さぁさ、早く顔を洗ってらっしゃい、裕二郎」
裕二郎、車を抱えたまま洗面所へ向かう。
早苗「悪いねぇ、仕事で疲れているだろうに。あなたは昔から機械いじりが得意だからね。お父さんの影響だね」
早苗、少し寂しそうな表情をする。
久志「そうですね。あ、そうだ、今日は朱美さんが遊びに来られます」

○同・作業小屋・夕方
工具やネジなどの部品が並んだ小さい作業小屋内で、裕二郎の車を直す久志。裕二郎と朱美が側で作業を見物している。
久志「さぁ、できたぞ、裕二郎。ゼンマイを巻いて、動かしてごらん」
裕二郎に車を手渡す久志。裕二郎は嬉しそうに受け取り、ゼンマイを巻く。直後、おもちゃの車が元気よく動き出す。
裕二郎「うわぁ、ありがとう、お兄ちゃん」
裕二郎、車を抱えて小屋から走り去る。
朱美「すごいわね、機械が得意だなんて、知らなかったわ。私なんて裁縫所の機械もろくに扱えないのに」
久志、使った工具を片付け始める。
久志「機械技師だった父の影響で、小さい頃から機械いじりが好きだったのです。この小屋も、父の仕事場をそのままにしてあるんです。戦争が終わったら、ちゃんと大学で機械工学を勉強したいから、自分で算数

や工学を勉強して、時々ここで機械をいじってるんです」

久志、そう言って朱美に微笑む。

朱美「素敵な夢ね。ウチは父が数年前炭鉱事故で亡くなって以来男手がないから、機械とは無縁なの」

久志「炭鉱事故で…それは気の毒でしたね」

朱美「えぇ、母も当時は大変だったけどね。久志さんのお父様は出征されたの？」

久志「はい、まだ戦争が始まった頃に召集され、それから直ぐに亡くなったと電報が来ました」

朱美「（残念そうに）…そう、悲しいわね」

久志「えぇ、でも僕達も、最近漸く前向きに生きて行くことができ始めていますから」

朱美「…逞しいわね、皆さん」

久志、小屋の窓から庭で遊ぶ裕二郎の姿を温かい目で見つめる。

久志「あのチビのおかげです。僕も母も、あいつの無垢な姿に助けられてきました」

朱美「分かるわ、私にも幼い妹がいるから」

久志「近い内に会ってみたいな、妹さんにも」

朱美「えぇ。是非。妹も母も喜ぶわ」

○八幡神社・夕暮れ時

既に桜は散り、日の入り時間も伸び、未だ外は明るい。神社の境内でお参りをする久志と朱美。

久志「何をお願いしたのですか？」

朱美「戦争が早く終わるように、あと家族が健康でいられるようにって。久志さんは？」

久志「僕も同じ。早く勉強ができるようになればいいなって。じゃ、行きましょうか」

神社の出口へ向かう二人。ふと朱美がしめ縄が巻かれた、大きな杉の木に気付く。

朱美「うわぁ、大きな杉の木」

久志「僕が子供の頃から大きかったですからね。もう何百年もここにあるんでしょう」

朱美「何百年…すごいわね。これからもずっとあり続けるんでしょうね」

久志「そうですね。僕達の次の世代も、次の次の世代も、ずっと見守っていて欲しいな」
ゆっくりと出口へと歩き出す二人。
久志「そういえば昨晩、また真司少年の夢を見ましたよ」
朱美「まぁ、また？これで何度目かしら」
久志「週に一、二度の頻度ですが、どうやら真司も僕達のこと夢で見ているようです。僕達の話をしていましたから」
突拍子もない話を楽しむように聞く朱美。
朱美「ふふ、夢にしてはよくできたお話ね」
久志「はい、ただ何度か夢を見て、真司少年の世界が、どうやら今から80年後の日本だということが分かりましたよ」
朱美「（驚いた表情で）まぁ、80年後？未来ってこと？日本は戦争には勝ったのかしら」
久志「さぁ、そこまでは分かりませんが、少なくともう誰も戦争の話はしてません」
朱美「いいわねぇ、戦争が無くて…」
久志「そうですね」
出口の鳥居の前で、神社に一礼する二人。
朱美、興味津々な様子で久志に尋ねる。
朱美「他にはどんなことが分かったの？」
久志「日本であることは間違いないみたいです。今と大分違い、妙な言葉遣いですが、皆一応日本語で会話をしています。暦を見ると令和6年とありました」
朱美「令和…やっぱり聞いたことがないわね。今が昭和119年だから、元号が何度変わったのかしらねぇ…80年後と言ったら、もし私達が生きていたら、百歳よ」
久志「百歳…何だか想像できませんね」
朱美「ふふ、そうね。それに、真司さんの時代のお年寄りは、皆さんあまり幸せそうには見えなかったんでしょ？」
久志「お年寄りも、です。真司も、他の人達も、決して貧しくはないのに、あまり幸せそうに見えない…以前話した、巣魔補という道具ばかり使っていて、家族の中でも会話も触れ合いもすごく少ない」

朱美「まぁ、悲しい。家族が皆一緒にいられることが、どんなに幸せなことか…良かったわね、私たちの時代にその巣魔補と言うものが無くて」

朱美、寂しそうな表情を作る。久志も考え込み、難しい表情を作る。

久志「…真司少年は、僕たちとそこまで年齢は変わらないと思うのですが、周囲の人の言動や行動に流されてばかりで、自分の意見や信念をあまり持っていないのです」

朱美「あら、そうなの？」

久志「ええ、何だか見ていて、とても歯がゆくて…本当に甘えた奴です、真司は」

久志の強い様子に、少々驚く朱美。ただ直ぐに落ち着いた様子で久志を諭す。

朱美「そうかもね。でも、十八、九歳の時に、確固とした自分の意見や信念を持った人なんて、稀じゃないかしら。今私達がそういうふうに思うのは、戦争という最悪な出来事のせいで、少し生き急いでいるからかも知れないわ」

久志、驚いた様子で朱美を見る。

久志「そんなこと考えもしなかった…すごいな、朱美さんは」

朱美、にっこり笑い、軽い態度で返す。

朱美「私は真司さんに会えないから分からないだけかも。それにもし私が真司さんに会ったら、頬を引っ叩いて根性叩き直すかも」

久志、朱美の過激な発言に驚きながらも、ニヤッと笑って返す。

久志「是非見てみたいな、その光景」

朱美「でも、もし仮に真司さんが実在するとしても、今から80年も先のことですもの。私達、その頃にはきっともう死んじゃってるわ」

久志「そうですね。僕らには関係のない世界の話だ。そもそも僕の勝手な夢な訳ですし」

朱美「でも、本当に不思議ね。何故久志さんが真司さんの夢を見るようになったのか」

久志、帽子を脱ぎ、頭を掻く。

久志「それは僕にも全く分からないんです」
日が沈み、辺りは暗くなり始めている。

○凪町・深夜
真っ暗闇、静寂の中、突然けたたましく
空襲警報が鳴り響く。

○沢崎家・久志自室
久志、警報の音で起き上がり、窓から外
を見る。そこへ早苗と裕二郎が緊迫した
表情で久志の部屋へ入ってくる。
早苗「どうだい？」
久志、窓の外から視線を離さず答える。
久志「どうやら、この町ではないようです」
不安げに早苗の体にしがみつく裕二郎。
早苗「…隣の花水町じゃないかい？あそこは
大きな工場がたくさんあるから…」
早苗、ハッとして久志を見る。
早苗「朱美ちゃん、花水町だったよね？大丈
夫だろうか…」
花水町の方角で、時折ポツポツと朱色の
閃光が起こる。久志、唇を噛み、強く拳
を握る。

○花水町・朝
一台のバスが停車し、中から一番に久志
が降りてきて、一目散に走り始める。町
のあらゆるところで、黒い煙が立ち上っ
ている。

○伊藤家・朝
久志が伊藤家付近に来ると、家から煙が
立ち上がり、半分以上焼失している。久
志、表情を曇らせる。家の前には人だか
りができている。
久志「すみません、通してください…通して」
群衆の先には、朱美はじめ近所の人達が、
足を怪我した朱美の母・千代(39)を荷車
に乗せようとしている。息を整える間も
なく、朱美に話し掛ける久志。

久志「（呼吸荒く）…朱美さん」
朱美、声の方を振り返る。
朱美「久志さん…どうしてここへ？」

○花水町・診療所・朝
昨晩の空襲で怪我を負った多くの人でごった返す診療所。職員達は忙しそうに働いている。そこへ近所の男達が引く荷車に乗った千代が、朱美、妹の紅美(5)、久志に付き添われ到着する。看護婦の一人が一同を出迎える。
看護婦「どこを怪我しました？」
朱美「右足です。昨夜避難する最中に転倒…」
看護婦「（遮って）ではこちらへ。付き添いの方はお引取りください。邪魔になります」
× × ×
朱美と久志、荷車を押してきてくれた男達に深く頭を下げ、見送る。朱美の横では、紅美が朱美のモンペを握り立っている。診療所の外れの石垣に腰掛ける三人。
朱美「親戚のおじさんがね、しばらく私たちを家に置いてくれるって」
久志「それは良かった。家はまた直せばいい」
朱美、俯いて頷く。
朱美「久志さん、本当に来てくれてありがとう。昨夜防空壕へ避難する時に、転倒して土手を転がってしまって…」
久志「朱美さんの家に男手がないって昨日言ってたから、役に立てるかもと思って…でも怪我で済んで幸いです。助からなかった人達も大勢いる」
布を被せられ、担架で運ばれる遺体に目をやる久志。布からは黒焦げになった腕がはみ出しており、ブルッと震える。
久志「…昨夜警報が鳴り、花水町の方角が赤く光る度、気が狂いそうだった…本当にみんな生きてて良かった」
朱美、顔をくしゃくしゃにして泣き始め、顔を両手で覆う。
朱美「怖かった…本当に怖かったわ」

紅美「お母ちゃん、大丈夫かな」
久志、笑顔で紅美の頭を撫でる。
久志「大丈夫だよ。紅美ちゃんも、よく頑張ったね」
久志、二人の肩に手を回し、自身の体に寄せる。上空の青空に向かって、未だ黒煙が何本も立ち上っている。(FO)

○亀宮高校・三年四組教室・日中
(FI)国語の授業が始まり、生徒は皆緊張の面持ち。外は雨がしとしと降っている。
熊谷「それじゃ、先週の中間テスト返すぞ」
次々に名前が呼ばれる中、真司は祈るように下を向き、自分の名前が呼ばれるのを待っている。
熊谷「門真ぁ」
真司、いそいそと熊谷の元に行き、テストを受け取りすぐ点数を見る。55点。トボトボと自分の席に戻る。次々に名前が呼ばれ、有紗は点数を見て小さくガッツポーズしている。
真司「(小声で)終わった…」
× × ×
休み時間、机に突っ伏す真司。そこへ有紗が無神経に声を掛けてくる。
有紗「お疲れ、門真…って、あんた大丈夫?」
反応なし。有紗、前の席の椅子に座る。
有紗「どうだった?中間。今回頑張ったんだぁ、私」
真司「…見て分かれ」
有紗「(少し気まずそうに)あちゃー、駄目だった?」
真司「…終わったかも、推薦入学」
有紗「ドンマイ、ドンマイ。推薦じゃなくても、一般入試もあるしさ」
真司、顔だけ起こし、有紗を睨む。
有紗「…ごめん。流石に無神経だった」
真司「よく分かってんじゃん」
有紗「てかさ、あんたやっぱ絶対理転した方が良いって。そうすりゃ今からでも推薦取

れるっしょ」
真司、少し考え、深いため息をつく。
真司「…そっちの方が楽なのかなぁ」
煮え切らない真司の態度にイラつく有紗。
有紗「あんたさぁ、まさかあの久志のことまだ気になってんじゃないの？それで勉強に身が入らないとか」
真司、少し意外と言った風な顔をし、体を起こす。
真司「いや、勉強に身が入らないのは元々だ。ただ、久志の夢な、あれ定期的に見るんだ」
有紗、結構本気で驚く。
有紗「へぇ、そうなの？気になるぅ」
真司「久志が昭和19年って言ってて、年表見たら1944年で、ちょうど今から八十年前だな。戦争真っ最中で、こないだも空襲で彼女の町が燃えちゃった」
有紗「え？彼女は？」
真司「朱美さんは無事。家族も…お母さんは足怪我したけど」
有紗「あぁ、良かったぁ」
真司「何でだよ」
有紗「なんか、もう他人事じゃないような気がしてきた」
真司「お前関係ないじゃん」
有紗「いやいや、関係者として、見届ける義務があるじゃん」
真司「関係者って…事件じゃないんだから」
有紗「思い切ってあのお婆さんにもう一度会ってみたら？」
真司、凍りついて有紗を見る。
真司「マジで言ってんの？」
有紗「マジ。大マジ」
真司「そんな時間も勇気もねぇよ」
有紗「時間はあんでしょ？」
再度睨む真司。有紗、軽い口調で答える。
有紗「ごめんごめん。で、ちなみに空襲ってどこの町だったの？」
真司「え…ここから近かったぞ、確か花水町」
有紗「何月？」

真司「確か…5月？」
有紗「そっか、了解。また続き聞かせてよ」
去っていく有紗。真司、再度俯く。

○学習塾・東湘ゼミナール・教室・夜
真司含め50名ほどの学生の前で教鞭を取る国語講師・藤本一（51）。真司、ウトウトし、ついには机に突っ伏し眠り込む。
すると、いきなりバンっと黒板を叩く音がし、驚いて目を覚ます真司。
藤本「やる気ない奴は帰っていいぞ。誰とは言わないけどな。本人の責任だし、こっちもそんな奴に教える気はない。だけどな、全員これだけは覚えておけよ。大学受験、いやこの世界はな、弱肉強食の世界、いわば戦争なんだよ、今お前らの隣に座ってる奴らとのな。生き残りたけりゃ死ぬ気で勉強しろ」
授業を続ける藤本。真司、無表情で黒板を見つめる。

× × ×

授業後、入り口で数人がたむろしており、その中に矢野と岡野を見つける真司。
真司「おす、お疲れ。明日さ、久々にカラオケ行かね？最近ストレス溜まっちゃって」
岡野「ワリィ、俺止めとくわ」
矢野「俺もパス」
真司「え、どうしたの？」
岡野「俺、中間の結果あんま良くなくってさ。そろそろ本腰入れて勉強しないと」
矢野「俺も受験モード」
真司「そっか…了解」
真司、矢野と岡野を後にし、一人自転車で夜道を走り去る。

○門真家・夜
真司、疲れた様子で帰宅する。時計を見ると10時半を過ぎている。
真司「ただいま」
奥から道子がパタパタと足音を立ててや

ってくる。

道子「おかえりー。ご飯食べるでしょ」

真司「うん…」

×　×　×

真司、リビングのテーブルに一人ポツンと座り、ボーッとでテレビのバラエティ番組を見ながら夕食を摂る。その後入浴し、自室へ戻る。そこへ道子がドアを開けて入ってくる。

道子「真司、あんた、そろそろ志望大学決めなさいよ。それ次第でもっと予備校のコース増やさなきゃいけないかもしれないし」

真司「…分かってるよ」

道子「そういえば、中間テストどうだったの」

真司「（気まずそうに）あんま良くなかった」

道子「（声のトーンを上げ）あんま良くなかったって…推薦取るためには一学期の成績が重要なのに…もう、なんでもっと真剣に勉強しなかったのよ」

真司「あー、うるさい。もう出てってよ」

真司、無理やり道子を追い出し、ドアを閉め、机に座り、無意識にスマホを触るが、すぐに画面を切り、ため息をつく。

真司「疲れた…今日はもう寝よ」

真司、部屋の明かりを消しベッドに入る。

○喜多川家・有紗自室・夜

有紗が勉強していると、一階から、誠と母・愛子(46)の口論が聞こえてくる。

誠「…お前がいつも有紗を甘やかすから、あいつは…」

愛子「…どうしていつも私のせいにするのよ。あなただって…」

有紗、イヤホンを付け音楽を流す。(FO)

○沢崎家・久志自室・朝

6月、雨が降り朝からジメジメする室内でゆっくり目を開ける久志、思わず呟く。

久志「（小声で）疲れる夢だ…」

○沢崎家・玄関・朝

玄関で靴を履く久志。側には早苗と裕二郎が立ち、見送りの準備をしている。

早苗「今日は朱美ちゃんの所へお見舞いに行くんだってね。よろしく伝えてくださいな」

久志「分かりました。9時までには帰ります。裕二郎、それまで家を頼むぞ」

裕二郎「はい、お兄ちゃん」

久志、ふと思いついたように尋ねる。

久志「裕二郎、学校は好きか？」

裕二郎「（母を横目で見て）うん。好きだよ」

久志「（微笑んで）そうか。本当は？」

裕二郎、再度早苗を見ると、早苗も微笑んでいる。

裕二郎「…今はあんまり好きじゃない。先生がみんな揃って、お国のためと言って、作業の手伝いとか、槍で敵を撃滅する練習ばかりさせられて、勉強できないんだ」

久志「じゃあ、勉強は好きか？」

裕二郎の顔が明るくなる。

裕二郎「うん、新しいこと習うのは楽しいよ」

久志「そうだよな、勉強は、本来そうあるべきだよな。では、行ってきます、お母さん」

早苗「いってらっしゃい、久志。気をつけて」

○街中・朝

傘をさし、雨の中鉄工所へ歩いて向かう久志。街頭では雨にも関わらず町内集会が開かれ、大勢の聴衆が集まっている。

男「誇り高き我らが大日本帝国軍は、東南アジアで連戦連勝し、着実に勝利に向かっているが、憎き米兵が我が国に上陸した暁には、国民総動員、お国のため玉砕覚悟で、最後の一人になるまで戦うことが真の日本国民としての勤めなのである！」

群衆から拍手や賛成、激励の声が上がる。

立ち止まらず、職場へ急ぐ久志。

○花水町・中野家（朱美の親戚）・夕方

薄明るい豆電球の下、質素な食事が並べ

られた長机を千代、朱美、紅美、久志、そして朱美のおじ夫妻・中野昭雄（48）と三重子（45）が囲む。

千代「娘達が色々と世話になって、本当にありがとうね、久志さん」

久志「いえ、僕はただ皆さんが心配で…」

千代「良かったら、ご飯もおかわりしてね」

三重子、横目で千代を睨む。千代は気づかないフリをし、遠慮がちの久志の茶碗を取りご飯を盛る。朱美は気疲れしている様子。黙々とご飯を食べる紅美。三重子、うんざりした様子でため息を漏らす。

三重子「はぁ、最近は配給のお米の量もめっきり減っちまってねぇ。ウチの人も、まるで仕事が見つからないし…お国のために戦って、右腕まで無くしたってのに、この様だよ。嫌になっちまうねぇ、本当に」

久志、気まずそうに下を向く。机の向かいでは昭雄が不器用そうに左手で箸を使い、食事している。

三重子「洋介さんが炭坑で亡くなったのが救いだよ。これ以上食い扶持増やされたら、たまったもんじゃねぇ」

千代、怒りの表情をするも何とか堪える。

昭雄「…お前、いい加減にしないか、みっともない。久志くん、だったかな。今日は遠慮せずたくさん食べてくれよ」

久志、申し訳なさそうに頷く。三重子は不満気な様子。

久志「兎に角、みんな無事で本当に良かった」

朱美、小さく微笑み米を口へ運ぶ。

○花水町・バス停・夜

薄暗い電灯の下、バスが来るのをベンチに座って待つ久志と朱美。

久志「すみません、ご馳走になった上に、バス停まで来ていただいて」

朱美「いいのよ、すぐ近くですもの。それに、ごめんなさいね、おばさんのこと…戦争が始まる前はすごく優しかったのに…」

久志「いえ、僕みたいなのが急に来たのがいけないんです。叔母さんは悪くない。でも、お母さんも良くなっているようで安心した」
朱美「うん、本当に」
しばらく沈黙する二人。
久志「そうだ、昨夜また真司の夢を見ました」
朱美「あら、そう。お元気？真司さん」
久志「それが、あまり元気ではなくて、僕も彼の夢を見る度、疲れて目覚めるんです」
朱美「まぁ、どうして？」
久志「…優柔不断なんですよ、真司は。あれじゃ戦争に勝てる訳がない」
驚いて久志を見る朱美。
朱美「まぁ、戦争？どこの国と？」
久志「いえ、そうではなく、彼は受験戦争中なんです」
朱美「（怪訝な表情で）じゅけん戦争？」
久志「真司の世界では、良い学校に入ることが何よりも重要で、真司も真司の周りの学生達も、その戦争に負けたら人生の終わりとでも言うように、毎日朝から晩まで死に物狂いで勉強している」
朱美「（動揺した様子で）そんな、生きてさえいればきっと別の道もあるのに…何だか可哀想ね、真司さん達」
久志「少なくとも真司は、自分のために勉強しているとは思えない」
朱美、信じられないと言った様子。
朱美「まぁ、じゃあ一体何のため？」
久志「それが無いんです。彼の人生は何となくの連続で、まるで自分の人生を生きていないんだ。僕達は勉強したくてもできないっていうのに」
苛立ちを隠せない久志に、優しく語り掛ける朱美。
朱美「どうしてそんなに真司さんに構うの？」
久志「人ごととは思えないんだ。何故だか分からないけど、構わずにいられないんです」
朱美、少し考えた後、空を見上げてゆっくり呟く。

朱美「ひょっとしたら、真司さんはあなたの子孫なのかもね」
久志、キョトンとして朱美を見つめる。
久志「僕の子孫？冗談でしょ？」
朱美「あら、私は本気よ。何かがきっかけで、久志さんと、その子孫が時空を超えて夢を通して繋がる、浪漫小説みたいで素敵じゃなくて？」
久志、少し呆れたような顔をするも、すぐに微笑み、恥ずかしそうに答える。
久志「仮にその話が本当だとしたら、まず僕がもっと成熟して、真司の手本とならなければなりませんね。恥ずかしいところを見せちまったなぁ」
朱美「無理しなくても良いのよ。人間、人それぞれ自分の成長速度があるんですもの。真司さんだって、きっといつか思い立って自分のために勉強する日々が来るわ」
久志、空を見上げる。
久志「そうですね、そう願います」
朱美「私たちも案外似たような境遇なのかも」
久志「え？」
朱美「大人達は、アメリカやイギリスが悪い国だと私たちに言い聞かせ、本当かどうか分からない教育を、無理やり私達に詰め込もうとして…私達はちっともそんなこと勉強したくにないのに。それって洗脳よ」
久志「…そうだね」
朱美、少し興奮気味に高い声を出す。
朱美「誰かに強制されて学ぶことは何であろうと、ろくなことじゃないわ」
久志、思わず周りをキョロキョロと確認するが、幸い誰もいない。顔を見合わせ、次の瞬間笑い合う二人。
朱美「真司さんも、私達も、早く好きなことを勉強できるようになると良いわね」
久志「うん、本当にそうだね」
久志、梅雨の合間に晴れた夜空を見る。
久志「（小声で）…あの日ね」
朱美「え？」

朱美の瞳を見つめる久志。

久志「あの日、桜が満開で、初めて真司の話をしたあの時、朱美さんは何が幸せか分からない、と言ったよね？」

朱美「うん、言ったわ」

久志、どこか緊張した様子になる。

久志「僕が何か言おうとしたら、どこからかおじさんが来て説教をしたよね？」

朱美、思い出して笑う。

朱美「嫌なおじさんだったわね」

久志「そうだね、僕はその後朱美さんに、何て言おうとしたか尋ねられて、他愛のないことを言ったんですが…」

朱美「真司さんの夢をまた見たら話してくれるって言ったわ」

久志「僕は、本当は…その後にこう言おうとしたんです」

久志、顔を赤くし、俯く。朱美は久志の顔を探るように伺う。

朱美「何て言おうとしたの？」

久志、言葉を詰まらせるが、ついには勇気を振り絞り、朱美の方へ向き直る。

久志「…僕は、あなたとこうして話をしている時が一番幸せです、と」

朱美、一瞬驚いたような表情を見せるが、すぐに穏やかな表情になる。

朱美「…私もよ」

見つめ合う二人。ちょうどそこへバスがやって来て、扉が開く。久志、バスに乗り込み、朱美の方へ向き直る。

久志「それじゃあ、また」

朱美「おやすみなさい」

バスの扉が閉まり、静かに動き出す。ガラス越しに見つめ合う久志と朱美。走り去るバス、それを長い時間見守る朱美。

○凪町中・夜

上機嫌で口笛を吹きながら、薄暗い町の明かりに照らされ、家への道を一人ゆっくりと歩く久志。

○沢崎家・玄関・夜

久志、戸を開けて玄関に入る。

久志「ただいま帰りました」

深刻な表情で奥からよろよろと歩いてくる早苗と、不安げな表情で追う裕二郎。

早苗「久志…とうとう来たよ」

早苗、震える手で、薄く赤がかった紙を差し出す。久志、紙面に目をやると、臨時召集令状、沢崎久志と書かれている。

久志「…とうとう来ましたか」

早苗、膝をついて顔を手で覆い、泣き崩れる。裕二郎は俯いて黙っている。（FO）

○門真家・真司自室・朝

額にすごい量の汗をかいて目覚める真司。

真司「…赤紙って、確か…」

○同・リビング・朝

テーブルで新聞を読みながらコーヒーを飲む達司。台所では道子が朝食を用意している。そこへ真司がパジャマ姿のまま降りてくる。

達司「おはよう」

真司「…おはよう」

真司、テーブルへつき、達司へ尋ねる。

真司「お父さん、あのさ…」

達司「（新聞を読みながら）ん？」

真司「ちょっと聞きたいんだけど…赤紙って知ってる？」

新聞から目を離して真司の方へ向く。

達司「赤紙？あぁ、戦時中の召集令状？」

真司、体を乗り出し、不安気に続ける。

真司「そう。その召集令状ってさ、それが来たら戦場に行かなきゃいけないんだっけ？」

達司「そうだろ」

真司「…断れないの？」

達司「無理だったろうなぁ。余程の理由がない限り」

真司、黙ってゆっくりと立ち上がり、ふ

らふらとまた二階へ上がって行く。その姿を見送り、新聞に視線を戻す達司。

達司「歴史の授業で習ったのかな？」

台所で包丁を使い、トントンという音を立てながら、道子が心配そうに答える。

道子「あの子、最近全然勉強に身が入ってないみたいで心配だわ。中間テストもイマイチだって言うし…」

達司「まぁまぁ。本人も色々大変な時期だろうから、気長に見てあげましょうよ」

道子、包丁を振り下ろし、トンという大きな音がリビングに響き渡る。

道子「呑気なこと言わないで。あの子の将来が掛かった大事な時期なのよ。もし大学に行けなかったら…」

達司「大学が全てなわけじゃないだろ…」

道子「高校三年生にとって大学受験以上に大事なものが他にある？」

達司「（数秒考えた末）…友達との思い出？」

道子「（ため息と共に）話にならないわね」

リビングに再び包丁の音が響く。

○駅前・バス停・朝

有紗、走って駅の階段から降りてくる。

制服が夏服になっている。

有紗「待ってまって、乗る、乗るって！」

無情にも目の前で学校方面行きのバスが発車する。地団駄を踏む有紗。

有紗「あー、クソが！」

周りの人々が驚いて有紗を見る。有紗、恥ずかしそうに愛想笑いする。

有紗「ったくもー、次のバスは…」

掲示板の時刻表を探す有紗、ふと、花水町方面という文字が目に入ってくる。

有紗「花水、そういえば…」

○バス車内・朝

学校方面行きのバス車内、スマホで＝花水　空襲＝と検索をかける有紗。検索結果をいくつかを見て、思わず呟く。

有紗「…マジか」

○亀宮高校・三年四組教室・朝

一限目、国語の授業が始まって数分後、後ろのドアから有紗が入ってくる。

熊谷「遅刻だぞー、喜多川」

有紗「ごめんなさーい、おはよーございまーす」

有紗、自分の席にそそくさと移動、周りの生徒がクスクスと笑っている。

熊谷「再来週はいよいよ期末テストだからな。気ぃ抜いてる場合じゃないぞ」

× × ×

休憩時間、真司が席を外し戻ってきた所、有紗がやってきて、真司の前の席に座る。

有紗「ちょっとちょっと」

真司「おう、遅刻女」

有紗「うるさい。それより今朝バス停にいたらさ、先月あんたがチラッと言ってた、久志さんの空襲の話を思い出して検索して見たんだけどさ」

真司、無言で自分の席に座る。

有紗「本当にあったみたいなのよ、昭和19年5月の空襲が、花水町で」

真司「そっか」

有紗「そっかって…あんた驚かないの？映画とか小説でしか聞いたことないわよ、こんな偶然」

真司「（平然と）昨日も夢見たんだ、久志さんの。で、なんとなく最近本当にあったことなんじゃないかって思い始めてた」

有紗「…なんとなく？」

真司「なんとなく」

有紗、数秒真司を凝視したあと、尋ねる。

有紗「で、昨日は何があったの？」

真司「赤紙が届いた」。

有紗「（後ろにのけ反って）…マジか」

× × ×

授業中、上の空で窓の外を見つめる真司。その姿を時折少し心配そうに伺う有紗。

○学習塾・東湘ゼミナール・教室・夜
教室に50名ほどの学生が座り、真剣に授業を聞いている。そこに真司の姿はない。

○門真家・夕暮れ時
元気なく帰宅する真司。
真司「…ただいま」
道子が台所から顔を出す。
道子「おかえり…ってあんた今日予備校じゃなかったの？」
真司、道子の顔を見ず、横を通り過ぎる際に、ボソッと言い放つ。
真司「…理転するから、もう予備校辞める」
真司、そのまま二階の自室へ。言葉が見つからず、呆然と真司の後ろ姿を見つめる道子。

× × ×

真司、自室へ着くと、明かりも点けず、椅子に腰掛け机に突っ伏す。

× × ×

夕食の時間になっても姿を見せない真司を案じ、鍵の掛かった真司の部屋の外で喚く道子。
道子「ちょっと真司、開けなさい。ご飯も食べないで。いるんでしょ？」
真司からの返事はない。
道子「真司…あんた一体どうしちゃったの？」
またも真司からの返事はない。

× × ×

室内で妙に落ち着いた様子で、窓の外、高く登った月を見つめる真司。
真司「…すごいよ、久志さんは」
直後一階で達司、道子、光が何やら激しい口調で会話する声が聞こえてくる。
真司「…ひぃちゃん？」

× × ×

真司、ゆっくり階下へ降りていくと、達司、道子、光が三人でテーブルに掛けている。光は穏やかな表情、道子は涙を流し、達司は困惑した表情を浮かべている。

真司が来たのに気付き、微笑む光、無言で真司を見る達司。

真司「ひいちゃん、どうしたの？」

光「真ちゃん、私大学辞めるから」

更に激しく泣く道子。驚きを隠せない様子の真司。達司、動揺を隠しながらも、説明しようとする。

達司「お姉ちゃんな、もう大学に退学届出しちゃったんだって」

真司「え…でも、どうして？」

光「私ね、小さい頃からずっと美容師になりたかったんだ。それでついに決心して、専門学校に通うことにしたの」

道子、ヒステリックな声を発する。

道子「勝手すぎるのよ、光も…真司も」

光「私は何を言われても怒らないし、否定しない。だってパパとママの言い分は正しいんだもん。でも真ちゃんを巻き込むのは止めて。真ちゃんはまだ自分の道が見つかっていないだけなんだから」

道子「勝手にしなさい！」

道子、猛烈な勢いで立ち上がり、泣きながら階段を駆け上がる。残された三人の間で、沈黙が広がる。

達司「…みんな、一旦落ち着こう。真司、夕飯まだなんだよな」

真司「…うん、俺自分でやるよ」

立ち上がる真司を、達司が手で制す。

達司「いいからいいから、座ってなさい」

台所で真司の夕飯の用意を始める達司。皿がカタカタと音を上げている。直後、皿が割れる音がリビングに響き渡り、駆けつける光と真司。

光「パパ、大丈夫？」

達司「大丈夫、大丈夫だから…」

達司、そう言って震える手で割れた皿の破片を拾い始めるが、徐々に速度が落ち、最終的に止まり、しくしく泣き始める。

達司「ちくしょう…どうしてこうなるんだ」

父が泣く姿を後ろから黙って見つめる光

と真司。（FO）

×　×　×

（FI）テーブルに座る三人。真司は夕飯のハヤシライスをゆっくりと食べている。

達司「それで、学費はどう工面するんだ？」

光「今のカフェのバイトで結構お金溜まったから、それで入学金と当分の学費はなんとかなるかな。当分はバイトも頑張んないと」

達司「そうか…あとでちゃんとお母さんにも話してな」

光「うん、もちろん。ごめんね、パパ…真ちゃんも、大変な時に動揺させちゃったよね」

真司「いや…大丈夫。むしろすごいなって」

光「何が？」

真司「松大なんて、俺がどんだけ頑張っても入れないくらいすごい大学なのに、それをあっさり辞めるなんて…」

光「真ちゃん、良い…」

達司「（光を遮って）良い大学、企業に入るだけが人生じゃないんだよ、真司」

光、頷く。真司、達司に向き合う。

達司「確かに良い大学に行くと、それなりに良い仕事や安定した収入を手にできるかもしれない。でもな、お父さん思うんだけど、いい給料貰えるけど退屈な仕事と、給料安いけど自分の本当に好きなことができる仕事、どっちが本当の幸せなんだろうって」

光「人生一度しかないんだからね、真ちゃん」

達司「そう、でもだからってお母さんが間違っている訳でもないんだよ。彼女は彼女なりに高卒として苦労してきて、お前達に同じような苦労をさせたくないと思ってるから、少し強い言い方になってしまうんだ」

光「うん、分かってる」

真司「…お父さんは、今の仕事好きなの？」

達司「俺か？もちろん、好きじゃないよ」

困惑した表情の真司。

達司「でもな、お父さんはすごく幸せだよ。お母さんとお前達がいて、決して大きくないけど一戸建ての家があって、おまけに狭

いけど庭で家庭菜園もできるし」
真司「農業が好きなら、農家になれば良かったんじゃないの？」
達司「いやぁ、農家になってたら今の幸せはなかったと思うよ」
真司「…そうなの」
達司「そう、お父さんもお母さんも、何をやるにしても、お前達二人が将来幸せになってくれさえすれば、それで幸せなんだから」
リビング横の階段で、皆から見えない位置で隠れて達司の話を聞いている道子。
真司&光「…」
しばし訪れる沈黙。
達司「あぁ、なんか話してたらお腹空いてきた。カップ麺あったっけ？」
光「え、あるけど…この時間にカップ麺…？」
真司「デブるよ」
達司、立派なお腹をポンと叩いてみせる。
達司「はは、もう手遅れだな」
そこへふらふらと道子が入ってくる。
道子「…泣いたらお腹空いた。カップ麺あったっけ」
光「あるよ、じゃあ私も食べようかな」
達司「よし、みんなでデブるか」
黙って夜食を食べる一家四人。（FO）

○亀宮高校・三年四組教室・日中
自分の席に座り、感傷的に窓の外を眺める真司。外では蝉が鳴いている。そこへ有紗がまた絡んでくる。
有紗「岡野に聞いたぞ、昨日予備校サボったらしいじゃん。ついに理転する気に…て、どうした、今日珍しくアンニュイな気分？」
真司、無言で有紗を一瞥し、軽く微笑む。
有紗「あ、なんかバカにされた気分」
真司「なんか最近何が正しいのか分からなくなってきちゃってさ」
有紗「どうした？何があったか話してみ」
真司「うちの姉ちゃんがさ」
有紗「あぁ、推薦で松大行った。すごいよね」

真司「大学辞めた」
有紗「えー！うそぉ、信じらんない…なんでよ？」
真司「美容師になるんだって。それが夢だったんだって。俺も両親も驚いたけど、もう自分で決めたことだからって」
有紗「はー、分かんないね。頭良い人は何考えてるか。私だったら、隕石が地球に衝突するって言われても多分辞めないだろうね」
真司「すごいよ、ひぃちゃん…姉ちゃんも、久志さんも。自分で自分の道決められてさ」
有紗「は？なんで久志？」
真司「久志さんもさ、機械技師になりたかったんだって。戦争中で未来が見えない時でもさ…明日を信じて毎日一生懸命生きてたんだ。すごいよ、みんな色々考えてて…俺なんか全然ダメだ…クソだよ、マジで」
真司、そう言うと人目を憚らず涙を流し始める。周囲の生徒が真司と有紗をじっと見ている。慌てふためく有紗。
有紗「マジか…私が泣かしたと思われてないか、これ？ちょ、泣くなって、門真」
近くにいた矢野、半分本気、半分冗談で話し掛ける。
矢野「痴話喧嘩ってやつか？お前ら」
有紗「うるせ、バァカ。（真司の腕を掴んで）あんた、ちょっと来なさい」
真司を廊下に連れ出そうとする有紗。後方ではまだ生徒達がざわついている。

× × ×

教室前の廊下で真司を落ち着かせる有紗。
有紗「あービックリした、急に泣き出すんだもん…あのね、あんたは全然ダメじゃない」
真司「（ぐずぐずして）…なんで？」
有紗「なんでもよ。あんた、見ず知らずの久志って人にそこまで感情移入できるんだもん。それってすごいことよ、多分」
真司「久志さんは、すごいんだ、本当に…」
そこでチャイムが鳴る。
有紗「とにかくさ、何やれば良いか分かんな

い時は、精一杯もがくのよ。それがやること。うん、私良いこと言った。いい？あんたはダメなんかじゃない。分かった？」

有紗、そう言って教室に入る。真司、手で涙を拭いて、有紗に続いて教室に入る。

真司「（小声で）ありがとう、喜多川」

○学習塾・東湘ゼミナール・教室・夜

満員のクラス、教鞭を振るう藤本。そこへ、真司が遅れて入ってきて、藤本と目が合う。数秒の沈黙後、藤本に謝る真司。

真司「遅れてすいません」

藤本「（ニヤッと笑い）おう、やっとやる気になったか、待ってたぞ。早く席つけ」

真司、真剣な表情で授業を受ける。

○門真家・リビング・夜

10時過ぎ、道子が疲れた様子で一人テーブルに掛け、何気なくテレビを見ている。そこへ玄関のドアが開く音がし、間もなく真司がリビングへ入ってくる。

真司「ただいま」

道子「あ、おかえり。夕飯、温めようか？」

真司「うん、カバン置いてくる」

真司、階段へ登る前、道子に向き合う。

道子「お母さん、俺、やっぱり理転しないで、今のまま予備校も通って受験頑張るから」

道子、少し驚いたような表情をするが、すぐに笑みを浮かべる。

道子「うん…そうか、よし。頑張れ、受験生」

真司「あと、ひぃちゃんも絶対大丈夫だから」

階段を登っていく真司。道子、眼鏡を外し、目元を手で擦り、台所で真司の夕飯の準備を始める。（FO）

○沢崎家・久志自室

（FI）久志、横になったままゆっくりと目を開ける。表情は穏やかで、再度目を瞑り、フッと安心したように笑う。

○沢崎家・日中

久志、早苗、裕二郎、そして朱美と紅美が小さいちゃぶ台を囲み、昼食を囲む。

朱美「すいません、沢崎さん、紅美も一緒に昼食に招いていただいて…」

早苗、穏やかに笑みを浮かべる。

早苗「いいえ、こちらこそいつも久志が世話になりありがとうね。明日はいよいよ出征の日だからね、久志も最後に朱美さんに会いたいだろうから…」

久志「(少し照れ臭そうに)お母さん…」

朱美「明日の朝、お見送りにも行きますから」

早苗「あら、いいのよ、そこまでしなくても」

朱美、茶碗をちゃぶ台に置き、強い意志を持った口調で答える。

朱美「いえ、行かせてください。行きたいんです、どうしても」

早苗、朱美の真剣な眼差しに応えるように、茶碗を置き、膝の上に両手を置く。

早苗「朱美さん、息子にそこまでしてくれて、本当にありがとうね。本当に…うぅ」

両手で顔を覆う早苗。

早苗「憎いね…本当に、戦争っていうものは。私の大事なものを全て奪ってしまう。智志さんだけでなく、今度は久志まで…あぁ、悔しい」

泣き続ける早苗、その肩を支える久志と裕二郎。それを肩を震えさせながら見守る朱美。紅美、ポカンとしながらも、早苗に語りかける。

紅美「泣かないで、おばちゃん」

早苗、涙でくしゃくしゃになった顔を上げ紅美に微笑み、紅美の頭を撫でる。

早苗「ありがとうね、紅美ちゃん。そうよね、泣いてる場合じゃないよね。久志、私達も頑張るから、あんたも死ぬんじゃないよ」

久志「うん、分かったよ」

○凪町内・川辺・夕方

裕二郎と紅美が川に向かって石を投げて

遊んでいる。太陽はまだまだ高い位置にあり、辺りは明るい。久志と朱美は川岸に座り、二人の様子を見ながら会話する。

朱美「あっという間だったわね、赤紙が来てから、今日まで」

久志「うん、本当に…」

朱美「今日は、本当にありがとう」

久志「いえ、こちらこそ。母も裕二郎も、すごく喜んでいる」

楽しそうに戯れる裕二郎と紅美。

朱美「あの二人を見てると、戦争なんて嘘みたいなのにね…残酷ね、現実って」

久志「うん、でもだからこそ思うんだ。あの子達の将来のためにも、今は残酷な現実に向き合わないといけないんだって」

朱美「戦わなくても良い未来は来るかしら」

久志「今はまだ…でも近い将来、戦争のない未来が必ず来る。真司の世界がその証拠さ」

朱美「まだ真司さんの夢を？」

久志「うん、最近も見たよ。彼も彼なりに厳しい現実を受け入れて、毎日必死に生きているんだ。変わったよ、真司は」

朱美「最初の頃はほんの少年みたいに話していたのにね」

久志「うん、最近の彼にはすごく勇気づけられるんだ。彼だけじゃない、彼の家族も友達も、現実を受け入れながらも、しっかり自分の考えを持って、一日一日を必死に生きている。最初は嫌な世界だと思ったけど、真司の世界もまだまだ捨てたもんじゃない。絶対に幸せになって欲しいよ、彼らには」

朱美「（久志の顔を探るように）会ってみたい？」

久志「え？」

朱美「真司さんに、会ってみたい？」。

久志「（空を見上げ）うん、会ってみたいな」

朱美「会えるかもしれないわ。うんと長生きすれば。だから…きっと帰ってきてね」

久志、朱美に視線をやると、夕陽に照らし出された朱美の目元が光る。

久志「うん、絶対帰ってくるよ」
川岸で裕二郎と紅美が何か騒いでいる。
朱美「あら、何かしら」
久志と朱美が二人に近づくと、座り込んで興奮した様子で何かを見ている。
久志「二人ともどうしたんだ？」
紅美「お姉ちゃん、見て、綺麗な石」
紅美、朱美と久志に紫色の石を差し出す。
それを観察する久志と朱美。
朱美「まぁ、綺麗。何かしら」
久志「これは…恐らく、紫水晶かな」
朱美「水晶？高価なものなの？」
久志「いや、加工されていないものはそこまで価値はないと思う」
裕二郎「なぁんだ、つまんない」
朱美、数秒考え込んだ後、何かを閃いたように、明るい笑みを浮かべる。
朱美「ねぇ、面白いこと思いついたわ」

○八幡神社・日の入り時
久志、朱美、裕二郎、紅美の四人が夕暮れ時の八幡神社にお参りをしている。朱美、誰よりも長く真剣に合掌している。
久志は、大きめのシャベルを、裕二郎はブリキのお菓子の缶と、久志に修理してもらったおもちゃの車を抱えている。

× × ×

以前久志と朱美が見た大きな杉の木の下に集まる四人。
久志「ここにしようか」
朱美「そうね」
久志、シャベルで木の下に、ブリキの缶が入るくらいの小さい穴を掘る。ブリキの箱の中を四人が確認すると、先程の紫水晶が入っている。
久志「それにしても、よく思いついたね」
朱美「以前久志さんが、真司さんも私達の夢を見てるって言ってたのを思い出してね。それで、もし、万が一、真司さんが夢でこの場面を見て、これを見つけたら…」

久志「この不思議な縁は本物、ってことだよね、理論上は」
朱美「もう、理論よりも、浪漫のお話をしているのよ」
笑い合う久志と朱美、ポカンとする紅美。
紅美「お姉ちゃん、しんじってだれ？」
朱美、紅美に優しく微笑み掛ける。
朱美「遠い世界で暮らす人よ」
突如、裕二郎がおもちゃの車を久志に差し出す。
裕二郎「お兄ちゃん、これも入れて」
久志、驚いたように弟を見る。
久志「え、いいけど…これ、お前が一番気に入っていた車じゃないか」
裕二郎「うん、でも、もういいんだ」
久志、裕二郎をじっと見つめた後、肩に手を置き、真剣な口調で語りかける。
久志「そうか、分かった。お前ももう、子供じゃないんだな。頼りにしてるぞ、裕二郎」
深く頷く裕二郎。久志、缶に蓋をする前に、胸元から封筒を取り出して入れ、蓋をし、小さい穴の底に置き、土をかける。
朱美「最後に何を入れたの？」
久志「真司への手紙さ」
朱美「あら、何て？」
久志「（ニッと笑い）不器用な彼への助言さ」
出口へ向かい歩き出す四人。
久志「見つけてくれるかな、真司は」
朱美「えぇ、きっと」
参道を歩いて帰る四人の後ろ姿を、美しい夕焼けが優しく照らす。（FO）

○汽車駅・朝
出征する者達を見送るため、大勢の人達で賑わう駅。家族と別れを惜しむ者、激励される者など様々。早苗、裕二郎、そして朱美に挨拶をする久志。
早苗「身体に気をつけるんだよ」
久志「はい、お母さんも、お身体を大事に」
久志、早苗の側で俯き、口を一文字に結

んだ裕二郎の目線の高さまでしゃがみ、肩に手を置き、目を見つめる。

久志「お母さんをよろしく頼むぞ、裕二郎」

裕二郎、涙を目に溜めた顔を上げて、しっかりと頷く。

裕二郎「はい」

久志、その様を見て満足気に頷く。そしてゆっくり立ち上がり、朱美の方へ向く。

久志「朱美さん…」

朱美「（精一杯の笑顔で）必ず帰ってきて」

久志「うん、約束する」

見つめ合う二人、そこで出発を告げる鐘が鳴り、汽車に乗り込む久志。

久志「（三人に敬礼して）…では、行って参ります。皆さん、お元気で」

早苗「必ず帰ってくるんだよ、久志」

裕二郎「お兄さん、お気をつけて」

朱美「待ってますから、いつまでも」

汽車の扉が閉まり、ゆっくりと出発する。扉のガラス越し、徐々に遠ざかる三人の姿を追う久志。汽笛をあげ、黒い煙を吐き、重たそうに走り去っていく汽車の後ろ姿をいつまでも見つめる早苗、裕二郎、朱美。朱美、とうとう我慢しきれず、その場に崩れ落ち、顔を手で覆う。朱美を介抱する早苗と裕二郎。汽車は既に米粒大の大きさになっている。（FO）

○門真家・真司自室・明け方

（FI）ベッドでガバッと勢いよく目覚める真司。目には涙が浮かんでいる。

× × ×

○同・一階洗面所・明け方

真司、顔を水で勢いよく洗い、ふと正面の鏡を見ると、そこには自分の顔でなく、鉄棒をかぶり、疲弊し泥だらけになった久志の顔が写っている。一瞬驚くが、どこか久志の穏やかな表情を見つめる内、その場にドサっと倒れこむ。（FO）

○フィリピン・レイテ島のどこか・日中
鉄棒をかぶったまま川の水で顔を洗う久志。頬はこけ、顔の泥はなかなか落ちない。ふと水面を見ると、そこには自分の顔ではなく、真司の顔が映っている。
久志「…真司？まさか…」
突如、真司の17年の人生のイメージが久志の脳内に入り込んでくる。
久志「…そうか、真司は僕の…」
直後、近くで爆発が起こり、吹き飛ばされる久志。数秒後、爆煙の中、血塗れで仰向けで横たわり、透き通るような青空を、薄れていく意識の中で見つめる久志。
久志「…お母さん…裕二郎…朱美さん…」
久志、ゆっくり目を閉じる。(FO)

○門真家・洗面所・早朝
達司「おい、真司、平気か？」
道子「ちょっとあんた大丈夫？」
音を聞いて慌てて駆けつけた達司と道子が真司を介抱する。真司、ゆっくりと目を開け、朦朧とした意識の中、呟く。
真司「…思い出した」(FO)

○喜多川家・朝
有紗、出発直前、リビングを覗くと、愛子がテーブルで俯いている。
有紗「ママ、大丈夫？」
愛子、ゆっくり顔を起こす。目元が涙で腫れている。
愛子「ごめんね、有紗…もうダメかも、私達」
そう言って、再度泣き出す愛子。そっと愛子を抱き寄せる有紗。
有紗「ママ、大丈夫、きっと大丈夫だから…」
泣き続ける愛子、有紗も黙って愛子を抱き続ける。(FO)

○亀宮高校・三年四組教室・午前
(FI) 熊谷が通信簿を配り、一喜一憂する生徒達。

熊谷「門真ぁ」
通信簿を受け取り、自分の席に戻ろうとする真司にボソッと声を掛ける熊谷。
熊谷「よく期末で取り返したなぁ、正直中間の時は心配してたよ」
真司、微笑を浮かべる。
真司「自分、後半伸びるタイプなんで」

○同・生徒玄関・正午
夏休みを控え学生達が浮かれながら次々下校していく。下駄箱で上履きから靴に履き替える有紗に、声を掛ける真司。
真司「おっす、喜多川」
有紗、真司を見上げて、目を丸くする。
有紗「珍しいじゃん、あんたから話し掛けてくるなんて」
真司、有紗の皮肉を無視して続ける。
真司「喜多川の予備校の夏期講習いつから？」
有紗「（うんざりした表情で）あーもう聞きたくねー、夏期講習って言葉。明日からがっつりよ。あぁ、私の夏休みは何処へ…」
真司「（遮るように）そっか、じゃあ今日の午後は空いてる？」
有紗、キョトンとして真司を見つめる。
有紗「あんた…本当に今日どうした？」
真司「…空いてないなら、いい」
有紗、立ち上がって真司に向き直る。
有紗「舐めんな、空いてるわよ」
真司「よかった。是非一緒に来て欲しいところがあるんだけど」

○バス車内
真司と有紗、バスの最後方の席に有紗が窓側で並んで座る。乗客の数はまばら。
有紗「あんた、いい加減行き先教えなさいよ」
真司「ん、もうちょっとで着くよ」
有紗「もうちょっと、って…もう30分近く乗ってるし…あ、でもちょっと待って、この辺なんか通った覚えあるわ」
真司「よくそう簡単に忘れられるよな」

有紗「何それ、どういう意味？私が来たことあるってこと？」

バスが停留所で止まり、前の座席に初老の女性が座る。

有紗「…まぁ、いいわ。目的地は楽しみにしとくとして、あんた、最近絶好調みたいじゃん。期末も良かったみたいだし」

真司「絶好調って程でもない。やっとエンジン掛かってきたって感じ。色々考えて、やっぱ理転しないで、今のままで受験するわ」

有紗「ふーん…まぁいいんじゃないの、あんたがそう決めたんなら」

真司「喜多川、言ってたじゃん、何やるか分からない時は、精一杯もがけって、それが今やることだからって。ぶっちゃけ、それで結構吹っ切れたんだ。だから、感謝してるよ。ありがとう」

有紗「（恥ずかしそうに窓の外を向いて）ふん、私はいつも良い事しか言わないのよ」

真司「（笑って）そうだっけ？」

有紗「そうよ当たり前じゃん。（再び真司の方を向き）そういえばお姉さん元気なの？」

真司「うん、大学辞めてバイト大変そうだけど、もうすぐ専門学校始まるからって楽しみにしてるよ」

有紗「すごいよねー、よくご両親許したよね」

真司「いや、家族に話す前に退学届出したんだ。最初両親も混乱してたけど、過去にこだわってても仕方ないって、最近は開き直ってる。すごい家族だよ、本当に」

有紗「…どこの家族でも何かしら問題を抱えてるもんよ」

真司「（少し驚いたように）そう…かもね」

窓の外に視線を移し、物思いに耽る有紗。

真司「おっし、次、降りるよ」

有紗「あ、うん…てか、思い出した。ここ…」

バスが停車する。バス停の名前は”雲雀荘前”となっている。

真司「そ、老人ホーム」

○老人ホーム雲雀荘・ロビー・日中

堂々とロビーまで歩いていく真司。若干ビクビクし、真司の後について歩く有紗。

有紗「あんた、よくそんな堂々と歩けるわね」

真司「なんで？喜多川も前、もう一回あのお婆さんに会えばって言ってたじゃん」

有紗「そうだけどさ、いざ来てみたら、うちら超アウェイじゃん…そもそも私達に会ってくれんの？そのお婆ちゃん」

真司「とりあえずこないだの広報の人に頼も」

真司、受付に着くと、女性職員に話し掛ける。

真司「すいません。僕達、今年の四月にボランティアでこちらに伺った、亀宮高校の生徒なんですが、今日って、広報のあの…」

女性職員「楢崎ですか？」

有紗「あ、そうそう、確かそんな名前だった」

受付女性「少々お待ちください」

受付女性、内線を使い連絡する。

有紗「（小声で）ちょっと、あのお婆ちゃん、痴呆症なんでしょ？私達のこと覚えてると思う？」

真司「喜多川のことは分からないけど、僕のことは分かると思う」

有紗「はぁ？だってあん時広報の人も、多分人違いだって言ってたじゃん」

真司「そう。あの時彼女は俺のこと久志って言って、俺は混乱してて自分の名前すら彼女に告げず帰った。でも久志の夢を通じて分かったんだ。俺が真司で、久志だって。彼女は絶対に分かる」

有紗「はぁ？あんたが真司で久志？私はあんたが何言ってんのか全く分かんない…」

そこへ、楢崎がやってくる。

楢崎「やぁ、こんにちは。君達だったんだ」

真司「こんにちは。突然すいません。あの、こないだ会ったお婆さんのことで…」

楢崎「あぁ篠崎さんね。歩きながら話そうか」

× × ×

廊下を話しながら進む真司、有紗、楢崎。

楢﨑「明日から夏休み？いいなぁ、学生は」
有紗「でもずっと夏期講習なんです」
楢﨑「（笑いながら）いやいや、若いのが良いなぁってこと。受験勉強も学生時代の夏の想い出の一つだよ。高校三年の夏なんて、人生に一度きりしかないんだから」
有紗「（理解に苦しむ様子で）…はぁ」
真司「あの、楢﨑さん…」
楢﨑「ん？なんだい？」
真司、少し緊張した面持ちで尋ねる。
真司「あのお婆さん…篠﨑さんって、下の名前は…」
有紗、思わず真司を見る。
楢﨑「名前？確か…朱美さん、だったかな」
真司と有紗、顔を見合わせる。

○同・老婆個室・日中
部屋の前まで来て、二人に向き合う楢﨑。
楢﨑「言ってなかったんだけど、実は篠﨑さん、先日体調崩してね。今は一日のほとんど寝て過ごされているんだ」
真司「え…そうだったんですか」
楢﨑「それでも会ってみるかい？」
躊躇する真司、有紗が真司を一瞥し、迷わず答える。
有紗「はい、是非お願いします」
楢﨑「うん、分かった。じゃあ、入ろうか」
真司、驚いた様子で有紗を見つめる。
有紗「（小声で）だって、ここまで来たら会わないで帰る訳には行かないでしょ」
ニヤッと笑う真司。
楢﨑「（ドアをノックし）失礼します」
室内から、どうぞと声がし、楢﨑がドアを開けると、篠﨑がベッドで寝ている側で、もう一人着物を着た上品な老婆が丸椅子に座って様子を見ている。
楢﨑「あ、オーナー、お見えになっていたんですか」
オーナー「こんにちは、楢﨑さん、お邪魔してますよ。いつも妹がお世話になっており

ます。そちらの方々は？」
楢崎「え、と…どこから説明すればいいか…」
真司、一歩前に踏み出す。
真司「あの、大変失礼ですが、オーナーさん、そのお婆さんの妹さん、でしょうか？」
オーナー、少し驚き、また警戒した表情で真司を見る。
オーナー「…ええ、そうですけど」
真司「失礼ですが、紅美さんですか？」
オーナー、更に驚いた表情をする。
オーナー「…そうですけど…一体あなたは？」
一瞬躊躇するも、勇気を出し答える真司。
真司「真司です、門真真司。信じてもらえるかわかりませんが、僕は、沢崎久志さんの生まれ変わりみたいなんです」
有紗「…は？」
一同、その場で沈黙する。紅美、椅子から立ち上がり、ゆっくり真司に近寄る。
紅美「まさか…あなた…本当に？」
真司「はい。証明もできると思います」

○BMW車内・日中
運転手、助手席に紅美（85）、後部座席に真司と有紗が座るBMWの車内。座席越しに紅美、真司、有紗が話している。
紅美「本当に驚いたわ。いきなり久志さんの生まれ変わりだなんて言い出されるから」
有紗「いやマジで。詳しく説明しなさいよ」
真司「言った通りだよ。昨日久志さんの夢見て、今朝鏡見たら、自分じゃなくて久志さんが映ってて…それで久志さんの記憶が頭の中に入ってきて、ぶっ倒れた。それで起きたら思い出したんだ、あぁ、俺、そういえば久志だったって」
有紗「いや、そうだけどさ…紅美さんはこいつのこんな漠然とした話信じるんですか？」
紅美「えぇ、姉からもよく真司さんの不思議な話は聞いてましたし、それに85年も生きていると、色々不思議なことも起こるわよ」
有紗「いやいや懐広すぎでしょ、紅美さん…」

紅美「そうかしら。あと今、性は沢崎よ」
真司「沢崎…てことはまさか裕二郎くんと…」
紅美「えぇ、そう、久志さんの弟の裕二郎さんと結婚したのよ、私」
真司「そう…だったんですか…それで、母と弟は？」
紅美と有紗、驚いて真司を見る。紅美、直ぐに冷静になり、話し始める。
紅美「裕二郎さんは久志さんの死後、自分がお母様を支えなければと言って、学校を出てすぐお仕事をしながら勉強し、ご自分で貿易会社を立ち上げ、お母様が昭和49年に70歳で亡くなられるまで、ずっと側でお世話したのよ。幸せそうだったわ、お母様」
真司「…」
紅美「裕二郎さんの会社もどんどん大きくなって、グループ会社もたくさんできたのだけれども、働きすぎで25年前に亡くなられたわ。まだ64歳だったのにね。この老人ホームもその事業の一つなの」
黙って話を聞いていた真司の目から涙が頬を流れる。
真司「…そうでしたか。頑張ったんだな、裕二郎は」
紅美「姉は久志さんの帰りをずっと待ち続け、それで沢崎家にも私を連れて頻繁に通う内に、私と裕二郎さんが親しくなり、あれよあれよという間に結婚。子供も男の子が三人いて、今は皆グループ会社で働いてるわ」
有紗、黙って話を聞いている。
真司「それで…朱美さんは？」
紅美、一瞬躊躇するも、決心したように話始める。
朱美「姉は久志さんの帰りをずっと待っていたのだけど、とうとう死亡通知が届いて…あの時は大変だったわ。それで戦後、会社で事務の仕事を始めて、そこで知り合った篠崎さんて方と結婚して…一時は幸せそうだったけど、子供もなく、旦那さんもご病気で早くに亡くなってしまって…それで私

が管理する雲雀荘で引き取ったというわけ」
真司、窓の外を眺め、黙り込む。突然、運転手が紅美に声を掛ける。
運転手「沢崎さん、間もなく到着しますが…」
紅美「そうね、ありがとう」
有紗「（混乱した様子で）…で、どこに向かってるんだっけ？私達」
BMWが停車する。三人が降りた場所には、鳥居が立っている。
有紗「ここは…八幡神社？」
紅美「えぇ、私も久々に来たわ」

○八幡神社・夕方
真司、無言でゆっくりと神社の中へ入り、真っ直ぐ杉の木の麓まで辿り着くと、手で地面を掘り始める。
有紗「げ…あいつ、何をするつもり…」
紅美、有紗に支えられ、ふらふらと真司の元へ駆け寄る。
紅美「あぁ、まさか…やっぱり、本当に…」
真司が地面を掘るのを見守る二人。すると、直ぐに何かが顔を出し、更に掘ると、ブリキの缶であることが分かる。
有紗「それ…昔のお菓子の箱？」
真司、箱を取り出し、泥を払い、慎重に蓋を開ける。中には紫水晶、おもちゃの車、そして封筒が入っている。それを紅美に差し出し、震える手で受け取る紅美。
紅美「あぁ…そうよ、80年前だけど、覚えてるわ。確かにこれよ。やっぱりあなたは…」
真司「紅美さん、朱美さんの所まで連れていってください。もうあまり時間がない」

○BMW車内・夕方
雲雀荘へ向かう車内、真司に尋ねる有紗。
有紗「ねぇ、時間が無いってどういうこと？」
真司「実は、僕の頭の久志の記憶が消えつつあるみたい。朝よりも今の方が記憶が薄い」
有紗「ちょ…嘘。そしたらもう…」
真司「今日いっぱい持つか怪しい。だからそ

の前に朱美さんに会いたい。それに…」
紅美「姉の寿命ね」
紅美が助手席から振り向かず呟く。
真司「…はい」
有紗、驚いて紅美と真司を交互に見る。

○老人ホーム雲雀荘・朱美個室・日没時
紅美、真司、有紗の三人が個室へ入る。
楢崎が丸椅子に座り、朱美の様子を見ている。三人が入るのと同時に話す。
楢崎「オーナー、妹さんの容体が…」
紅美、朱美の元へ駆け寄り、耳元で囁く。
紅美「お姉さん、久志さんよ。久志さんがいらっしゃったわ」
そう呟くと、ゆっくりと目を開ける朱美。
辺りを見回し、真司の姿を捉えると、目を見開き、満面の笑みを浮かべる。ゆっくりと朱美に歩み寄り、手を握る真司。
真司「朱美さん、長い間待たせてしまったね」
朱美「…あぁ、久志さん…やっと会えたわね」
真司、にっこり笑い、有紗に目をやる。
有紗、ブリキの箱を持って朱美に近づく。
朱美「あぁ…これもよく覚えてるわ。神社の杉の木の下に埋めたわね、あぁ、懐かしい」
朱美、そう言って涙を流す。自然と有紗の目からも涙が溢れる。
朱美「…全てが懐かしい。お母さん、紅美、篠崎さん…でも今は久志さんがいればいい」
真司の目からも涙が溢れる。
真司「朱美さん、では、そろそろみんなのところへ行こう、一緒に」
朱美「えぇ、えぇ。あなたとなら何処へでも」
朱美、そう言ってゆっくり目を閉じ、動かなくなる。楢崎、皆に一礼し、部屋を出て事務所方面へ向かう。紅美、涙を袖で拭き、真司に一礼する。
紅美「真司さん、ありがとう。最後に久志さんを連れてきてくれて」
真司「（手で涙を拭い）行ってしまいました」
紅美「え？」

真司「久志さん、僕の中の久志さんの記憶全部持って、行ってしまったみたいです、朱美さんと一緒に」

○同・入り口・夜

真司、有紗を見送る紅美と楢崎。

紅美「真司さん、有紗さん、いいの？本当にお家まで送らなくて」

真司「はい、紅美さんも楢崎さんもこの後色々大変でしょうから」

紅美「そう、悪いわね。兎に角、ありがとうございました。お二人のお陰で、姉も満足して逝くことができたと思います」

真司「いえ、こちらこそ。久志さんも、最後に朱美さんに会えて本当に良かった」

有紗「私も、最初信じられなかったけど…今日来て本当に良かったな、なんて」

紅美、二人に笑い掛け、懐から茶色い封筒を取り出す。

紅美「真司さん、これを忘れないで」

真司「え？いいんですか？紅美さん、頂いて」

紅美「もちろん。宛先はあなたなんですから。私は裕二郎さんのおもちゃの車を頂いたし」

真司「分かりました。では、これは僕がいただきます。手紙の内容は…」

紅美「（遮って）いいの。あなたへの手紙なのだから、あなたの心に閉まっておいて」

真司「分かりました」

紅美「それから有紗さん、良かったらこれ、もらってちょうだい」

紅美、紫水晶を有紗に渡す。有紗、両手を振って全力で断る。

有紗「いえいえ、駄目ですよ、こんな大事な思い出の品。そもそも私、部外者だし」

紅美「あら、一緒に奇跡を目撃することができた、大事な仲間だと思ってたけど？」

有紗「…紅美さん」

紅美「そうすれば、姉もきっと喜びます」

有紗「分かりました。ありがたく頂戴します」

紅美から紫水晶を受け取る有紗。紅美、

お茶目に笑う。

紅美「ふふ、それにひょっとしたら、まだ奇跡の効力が残ってるかもしれないわよ」

有紗「えー、じゃ早い内に使わないと、奇跡」

紅美、最後に優しく微笑む。

紅美「またいつでも遊びにいらしてね」

有紗「ありがとうございます。また来ます」

深く頭を下げ、バス停へ向かう二人。

楢崎「いやぁ不思議なこともあるものですね」

紅美「そうね。でもこれで私ももう思い残すことはないわ」

楢崎「何を仰ることやら。奇跡を目撃した方は長生きすると言いますよ」

紅美「あら、そうなの？」

楢崎「そうです。オーナーにはまだまだ社員一同甘えたいと思っておりますので」

紅美「ふふ、ありがとう」

楢崎「さ、中に入りましょう」

楢崎に支えられ建物に入る紅美。

○バス車内・夜

街行きバス車内。乗客は真司と有紗だけ。

真司「悪いな、喜多川。こんな時間まで付き合ってもらっちゃって」

有紗「いいのよ。むしろ、こっちがお礼言いたいくらい。滅多に体験できるもんじゃないわよ、こんなこと。あんたが理系強いってのも、久志さんの生まれ変わりってことで妙に納得したしね」

真司「…それなんだけどな…さっき言ったように、久志の記憶と一緒に、俺の中で色んなものが消えてく感じがしてて、多分理系の能力も近い内消えてくんだと思う」

有紗「（驚いて真司を見て）はぁ？何それ？そんな不公平なことある？」

真司「不公平かどうかは分からないけど、確かにそうなんだ。ま、元々俺に備わってない筈の能力を返すんだと思えば、ね。それに俺あんまり好きじゃないし、理系科目」

有紗「バカねぇ、本当に。棚ぼたって言葉が

あんでしょ？もらっときゃいいのよ、もらえるもんはなんでも。あーもったいな」

真司、フッと笑う。

有紗「そういえばさ、何て書いてあったの？久志さんからあんたへの手紙」

真司「え？まだ読んでないけど…」

有紗「見せなさいよ。私は紅美さんみたいにアダルトな対応はしないわよ」

真司「まいっか、今日付き合ってくれたし。ちょっと待ってよ」

真司、鞄から茶封筒を取り出し、慎重に手紙を取り出し、一読する。そこには一言だけ、「シンジへ、アリサクントオシアワセニ、ヒサシヨリ」と書いてある。

真司、直ぐに手紙を茶封筒に入れ、鞄に入れる。

真司「…やっぱダメ」

有紗「は？」

真司「やっぱり見せらんないわ、ごめん」

有紗「ちょ、ここまできてそれはないでしょ。よこしなさいよ」

有紗、真司の鞄を掴み無理やり奪おうとするも、真司の必死の抵抗に合う。

有紗「あんた、さっきは見せるって言ったじゃん。男らしく渡しなさいよ」

真司「無理、これだけは無理」

バス車内で奪い合いが続く。バスのガラス越しに映る二人の攻防戦の奥で、若き日の久志と朱美が座席に並んで座り、二人を温かく見守っている。（FO）

○喜多川家・夜

有紗が帰宅すると、リビングで再び両親の口論が聞こえる。有紗、一瞬躊躇するも、思い出したように紫水晶を取り出し握り、両手を合わせ、小声で囁く。

有紗「久志さん、朱美さん、最後に助けて」

有紗、思い立ってリビングへ入る。

有紗「…ただいま」

誠「有紗、お前こんな時間まで何してた？」

愛子「そうよ、心配してたのよ？」
有紗「心配してた…二人一緒に？」
愛子「そうよ、当たり前じゃないの。ね？あなた」
有紗「…パパは？」
誠「（少し間を置き）…あぁ、そうだよ」
有紗「そっか…まだ希望あんじゃん」
誠「何だって？」
有紗「私のことで二人共感できるじゃんてこと。まだ二人の心は完全に離れてないから大丈夫よ、ママ」
誠「…お前、一体何の話を…」
有紗「（遮って）パパ、私のこと大事に思ってる？」
誠「え…そりゃあ、もちろん…」
有紗「私、これから大学行って、いっぱいお金掛かって、二人に大迷惑かけるんだから、一緒にいてもらわないと困るんだけど」
誠「…」
有紗「あと、私一学期の成績すごい上がったんだ。だから今からどっかでお祝いしたい」
誠「…今から？」
有紗「そ、今から。ロイホがいいな、ロイホ」
愛子「（少し困惑気味で）有紗、悪いけど今そんな場合じゃ…」
誠「（小声で）…行くか、ロイホ、三人で」
愛子「…え？」
有紗「やったね…鞄置いてくるわ」
有紗、嬉しそうに二階へ去っていく。
愛子「…あなた」
誠「…しばらく食事してないだろ、三人で」
そこへ有紗が再び顔を出す。
有紗「いい、パパ、ママ。80年経ってから実を結ぶ愛もあるんだから。忍耐よ、忍耐」
有紗、再び二階へ向かう。誠と愛子、思わず顔を合わせ、ぎこちなく笑い合う。

× × ×

自室に入り、鞄を置き一階へ行こうとする有紗、ふと、窓へ行き、空へ手を合わせる。目には涙が浮かぶ。

有紗「ありがとう、久志さん、朱美さん」
有紗、一階へ駆け降りていく。

○ロイヤルホスト・夜
有紗、愛子、そして誠の三人が食事している。上機嫌の有紗、戸惑いながらも、楽しそうにする愛子、そして時折笑顔を見せる誠。夏の夜が更けていく。(FO)

○門真家・庭・日中
真司、達司、光が狭い庭で農作物の収穫をしている。
達司「こらこら真司、その万願寺とうがらしまだ早いだろ」
真司「えー、ちょうど良いんじゃない？」
達司「ダメダメ。ほれ、これくらいの大きさにならないと」
達司、手本を見せる。真司、見比べる。
真司「…同じじゃん」
達司「おいおい、全然違うだろ。ほら、よく見てみろ。この辺がだな…」
光「パパ、それよりスイカ、スイカ」
達司「おう、そうだな。どれどれ」
花壇の横に植えられたスイカを掘る三人。掘り出してみると、ソフトボールサイズのスイカが採れる。ガクッとする達司。
真司「…ちっちゃ」
光「えー、楽しみにしてたのにー」
そこへ道子が麦茶を運んでやってくる。
道子「だから向日葵にしようって言ったのに」
達司「いやいや、スイカは年々上手になる難しい作物と聞く。来年はもっと大きな実がなるさ」
道子「来年、ね。そうね、楽しみにしてるわ」
光「来年はハンドボールくらいにはしてよね」
達司「おう、任せとけ」
そう言って笑い合い、縁側に座り麦茶を飲む一家四人。ソフトボールサイズのスイカが太陽の光を受け、輝いている。
【了】